

日 当 遺 跡

HI

NATA

大分県野津町所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 58 輯

1982

大分県教育委員会

日 当 遺 跡
HI NATA

大分県教育委員会

序 文

日当遺跡の所在する野津町では、県内でも比較的早くから県営土地改良事業が着手されているところです。

県教育委員会では、これに対処するために昭和49年より野津地区埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。日当遺跡は、試掘調査の結果、非常に有望な弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である事が判明し、遺跡保存のための工法変更等について協議を重ねてまいりましたが、地元の年度内工事終了を望む声が高く、結果的には一部地区の保存にとどまり、遺跡の大部分について緊急的に発掘調査を実施することになりました。

冬期の悪条件の中で行った緊急調査であります。これによってこれまで空白とされていた大野川中流域の古代文化の一端が解明されるものと確信し、さらに本書が将来の文化財保護、あるいは調査研究に活用されることを祈念するものです。

なお、厳寒の中、調査を指導いただいた別府大学賀川光夫教授、県耕地課及び工事関係者並びに地元の方々のご苦勞に対し、心からの謝意を表します。

昭和57年3月31日

大分県教育委員会

教 育 長 友 田 享 史

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和54年度に実施した大分県野津町所在の日当遺跡の発掘調査報告書である。
1. 本書の執筆は清水宗昭、牧尾義則、高橋信武、吉留秀敏が担当した。なお執筆者は、文章の末尾に記した。
1. 遺跡の実測図作成は調査員および調査補助員があたり、遺物の実測図及び製図はそれぞれ執筆分担者があつた。
1. 図版写真は遺跡・遺物とも牧尾が担当した。
1. 調査から報告書作成にあたって別府大学賀川光夫教授の指導・助言を得た。
1. 本書の編集は牧尾があつた。

目 次

I 調査の経過	1
II 調査団の構成	1
III 遺跡の立地と環境	2
IV 調査の結果	4
1. 出土遺構	4
2. 出土遺物	20
a. 土器	21
b. 石器	31
c. 土器片加工品	33
d. 旧石器時代の遺物	36
V 考 察	37
1. 柱穴内遺物廃棄について	37
VI ま と め	40
VII 日当遺跡図版	43
VIII 日当遺跡周辺の資料	54
1. 日当西遺跡	54
2. 川平遺跡	60

I 調査の経過

野津町は、大野川の支流野津（野津院）川の流域にあり、阿蘇熔結凝灰岩による台地が発達している。これらの火山性台地は、たばこ栽培を主とした畑地としてよく利用されており、このため昭和48年頃より、県営土地改良事業が実施され、現在まで継続されている。

県教育委員会ではこれに対し、昭和49年に町内遺跡分布調査を実施し、昭和50年には町教育委員会が国庫の補助を得て、工事予定地内遺跡の試掘調査を実施した。

日当遺跡は、昭和55年度野津地区土地改良事業実施地区として、昭和54年10月に県農政部から協議があり、試掘調査の結果、弥生時代終末期の住居跡群の存在が確認された。このため、県教委は住居跡地区の工事除外もしくは工事の延期を申し入れたが、地元の早期着工の要望がつよく、年度内に農政部負担（第5項方式）によって発掘調査を実施した。

発掘調査は、住居跡が確認された工事予定地の中で削平される部分について全面発掘調査（約4,500㎡）を実施し、その他の試掘によって確認された住居跡については可能な限り盛土による保存の措置を構じた。

調査期間 第1次調査（試掘調査）昭和55年
1月9日～1月14日 第2次調査（本調査）
昭和55年2月4日～2月29日



発掘作業風景

II 調査団の構成

事業主体者 大分県農政部

調査主体者 大分県教育委員会

調査指導員 賀川光夫（県文化財保護審議会委員・別府大学文学部教授）

調査協力機関 野津町教育委員会

白杵土地改良事業事務所

野津町農林振興課

調査員 衛藤文則（県教育庁文化課文化財調査第二係長）

清水宗昭（県教育庁文化課主任）

牧尾義則（県教育庁文化課主事・調査担当者）

後藤一重（県教育庁文化課主事）

高橋信武（県教育庁文化課嘱託）

発掘調査は例年になく厳しい冬季にぶつかってしまい、作業の進行も思うにまかせなかったが、関係各位のご協力により一応の成果をあげることができた。とくに地元野津町教育委員会中野五郎氏、白杵土地改良事業事務所保月邦博氏、また作業に従事していただいた多くの方々のご協力に対し厚くお礼申し上げます。

III 遺跡の立地と環境

遺跡は大分県の西部、大野郡津町大字宮原に所在する。

野津町の南端より険しい谷を形成しながら北流する野津川・坂河内川は町の中央部で合流する。町南部の険しきとは異なり、北部には低位舌状台地を形成しながらさらに北流し、犬飼町で大野川と合流する。

野津町は県北と県南の中継地的な位置にあり、また、大野川中流という海岸半野部と九州山地部の接点を占める地理的に重要な地域でもある。

しかしながら、当地域ではこれまで本格的な調査も無く空白状態であったが、昭和49年より大野川土地改良事業に伴ない、埋蔵文化財分布調査、試掘調査を実施する事になった。

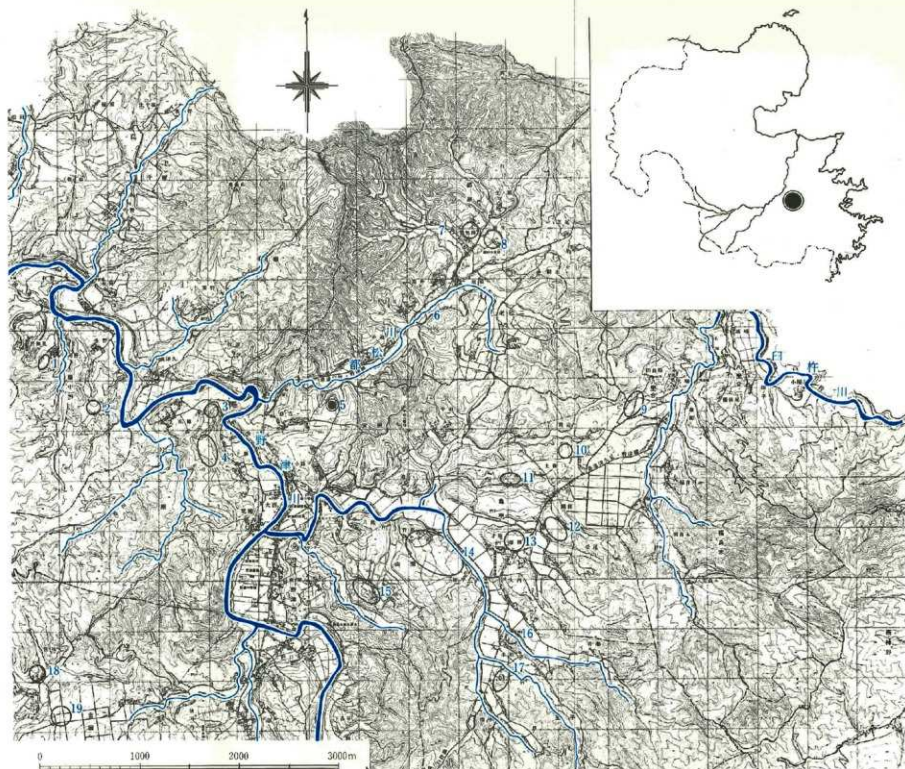
調査の結果、有史時代の遺跡はほとんど町北部の低位台地に集中する事が判明した。

遺跡は旧石器時代から広範にわたるが、同町所在の遺跡を概観すると、大野川上流域にあたる竹田市、萩町等で見られる弥生時代から古墳時代の集落遺跡等による旧石器・縄文時代遺跡の破壊が当地域ではほとんど見られず、単純遺跡として良好に残存しているものが多い。

ヨ当遺跡は同町においては初めての弥生時代集落跡の本格調査であり、遺跡自体も他時代の覆合がほとんど無い比較的单純な状態であった。集落跡は野津町に特徴的な地形である緩傾斜のボウズ山状の台地にある。標高110mで、北側に隣接して、湧水を有する絶好地である。

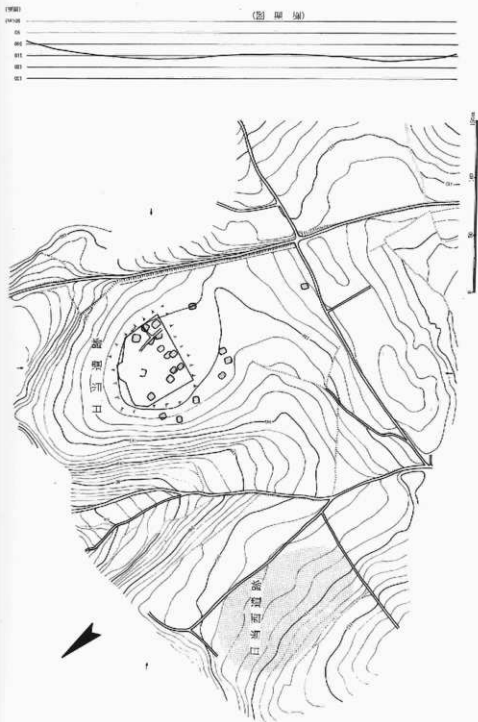


日当遺跡遠景(東側台地より)



- | | | | | |
|--------------|-------------------|---------------|-----------------|----------------|
| 1. 内河野 (縄早後) | 5. 日 当 (縄早後晩・弥) | 9. 田良原 (旧・縄早) | 13. 塚 田 | 17. 留 水 (旧・縄中) |
| 2. 生 野 (縄早後) | 6. 筒 井 (縄後) | 10. 熊 迫 (縄早) | 14. 田 中 (縄早晩・弥) | 18. 笹枝A (旧・縄) |
| 3. 広 原 (弥?) | 7. 青無田 (旧・縄早前・弥) | 11. 花の木 (旧・古) | 15. 持丸原 (縄晩・弥) | 19. 笹枝B (旧) |
| 4. 原 (弥?) | 8. 新 生 (旧・縄早前中・弥) | 12. 土 橋 (旧) | 16. 水 地 (旧・縄) | |

第1図 野津町日当遺跡および周辺主要遺跡位置図



太線図内が日当遺跡でそ
の他の住居跡は試掘調査
及び工事中に確認した。



第2図 日当遺跡地形図

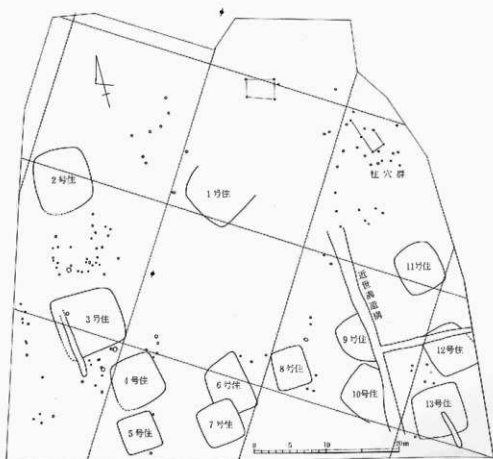
IV 調査の結果

1. 出土遺構

調査の結果、当遺跡で確認できた遺構は、弥生時代後期住居跡11軒、古墳時代住居跡2軒（5号住、8号住）で、これらはほぼ南北に主軸を取り、ボウズ山状の地形の頂部を取囲む様に造営されている。

全体的に残存状態は不良で、検出した遺構の大部分は壁を若干残すか、削平の特に著しい部分は壁を全て失ない、柱穴だけが残るといった状態であった。このような状態は特に遺跡北側で顕著に確認された。遺跡東側では一部近世の溝遺構を検出したが、遺構は浅く、さらに南北とも削平により途中で消滅、遺物の包含も皆無で、詳細は不明である。

また、遺跡周辺部についても試掘を実施したが、南側で数軒の良好な住居跡を確認した他は、ボウズ山の裾部に近くなる程削平がひどく、ローム層下層の露出が見られる。



第3図 野津町日当遺跡遺構配置図

1号住居跡

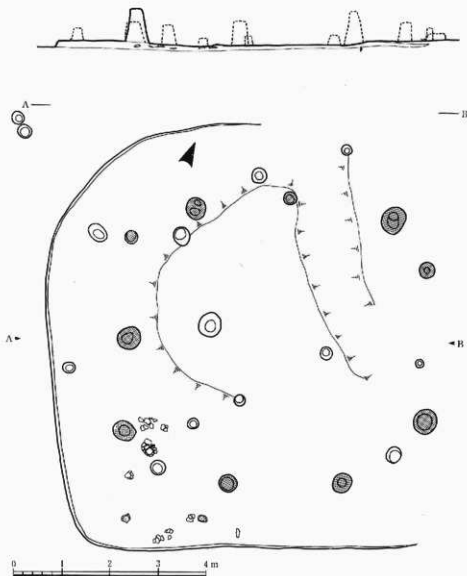
遺跡の最北に位置する。北東部の削平が著しく明確な輪郭は不明であるが、長軸9.3m、短軸9m以上、床面積約80m²が想定できる。住居跡形態は隅丸方形を呈すると思われる。

柱穴は、ほぼ円形に並ぶ10本が主柱穴と思われるが、柱穴の深さにレベル差がかなりあり、明確とは言えない。

住居跡床面は中央部がやや高く、側辺部はやや掘り凹められている。

もっとも残り具合の良い南側で、壁高10cm程度、少量の遺物も南側に集中して出土した。

その他の内部施設は確認できなかった。



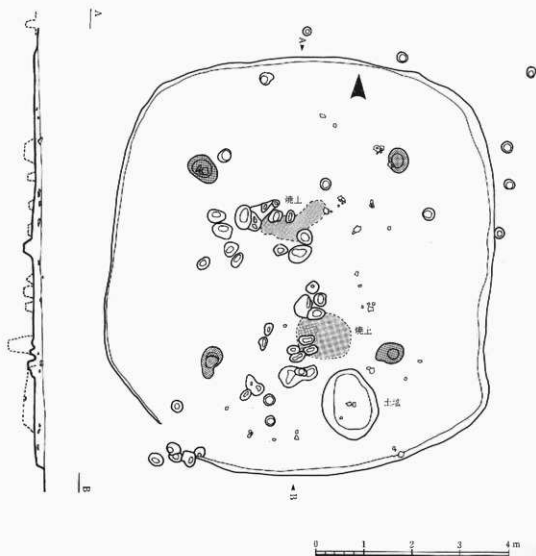
第4図 1号住居跡実測図

2号住居跡

北西端に位置する。南西部がわずかに消滅しているが、隅丸方形を呈する、長軸8.2m、短軸7.8m、床面積58㎡の比較的良好な住居跡である。

主柱穴は4本で、他に浅いレベルの後世の攪乱と思われる柱穴が若干みられる。

明確な炉跡はないが、住居跡中央部に近い南側、北側で焼土を検出したほかに、南隅で縦1.5m、横1m、深さ20cm程度の楕円形状の土域も出土した。

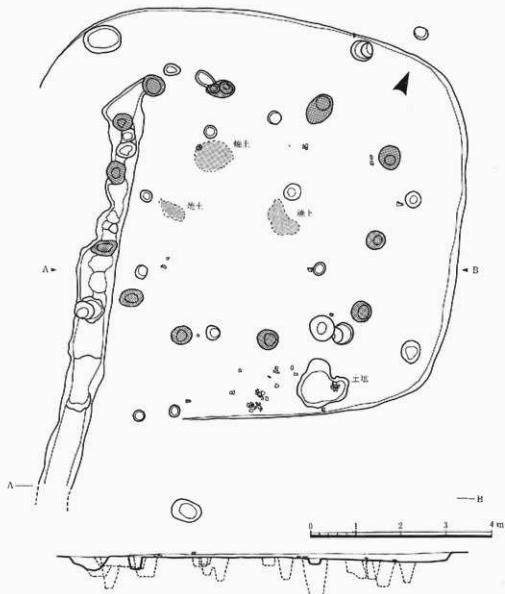


第5図 2号住居跡実測図

3号住居跡

北西面に位置し、南西部は近世溝状遺構の攪乱により消滅しているが、長軸9.6m、短軸9mを測り、床面積77m²程度である。

隅丸方形をなし、支柱穴は1号住居跡と同形式と思われ、円形に近い配列の12本が確認できた。焼土は住居跡中央部3ヵ所に見られ、南隅には縦1m、横1m程度の不定形土壇を検出した。なお、北西隅に見られる縦0.8m、横0.6m程度の楕円形土壇は、近世の攪乱によるものである。



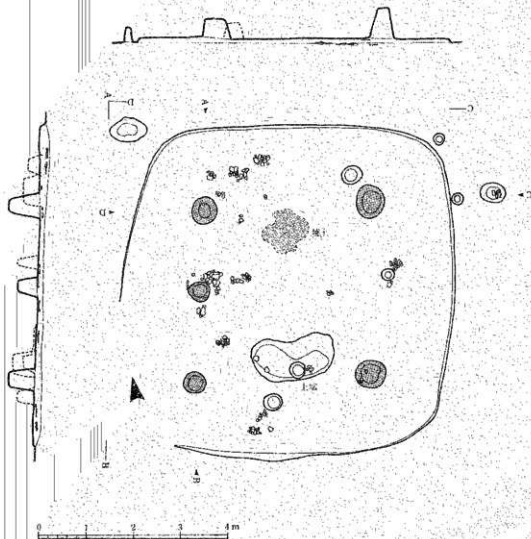
第6図 3号住居跡実測図

4号住居跡

遺跡の西南部、3号柱と5号柱の中間に位置する。住居跡は南西隅が一部消滅しているが、長軸7m、短軸6.8m、床面積45㎡以上を測る。

隅丸方形形状を呈し、主柱穴は西側3本、東側2本の計5本を数える事ができる。

壁高は削平がひどく、10cm～20cm程度の残存状況である。焼土は北寄り、縦2m、横1m程度の長楕円形状を呈する土埴は南隅で検出された。遺物は西方に集中して見られる。



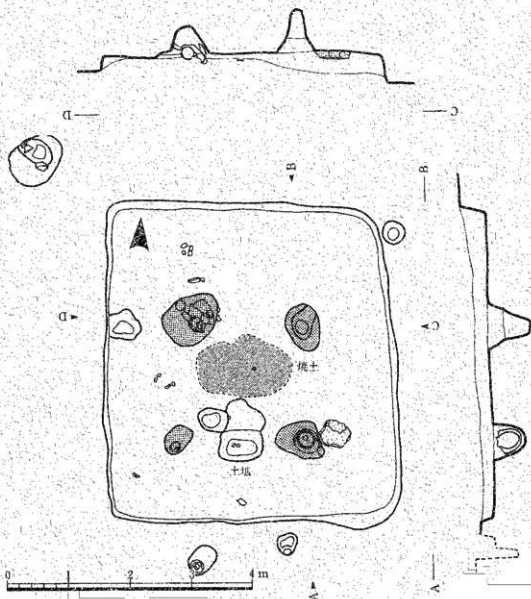
第7図 4号住居跡実測図

5号住居跡

4号住居の南側、遺跡南西隅に位置する。住居跡は長軸5.2m、短軸4.3m、床面積22㎡を測る。当遺跡出土住居跡群の中では、时期的にも新しく、壁高50cm程度が残る最も状態のよい住居跡である。長方形を呈する。

主柱穴は4本で、中央に焼土、南側に縦80cm、横40cm程度の土壇を有する。なお、住居跡南外側に近接して1対の柱穴が見られ、出入口の施設が存在が想定できる。

当住居跡内主柱穴3本に土器廃棄が見られるが詳細は後述する。



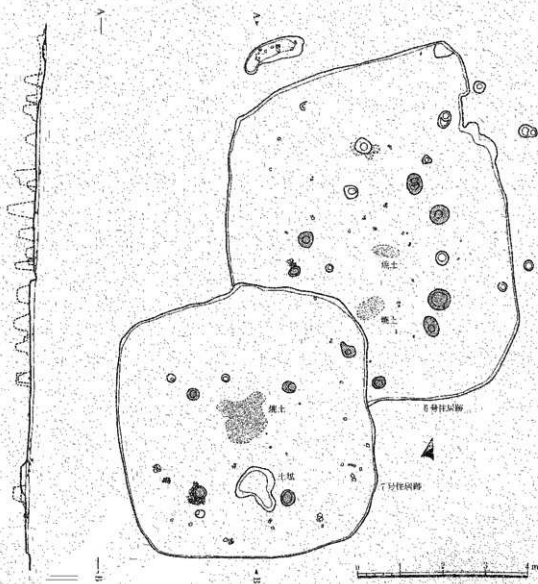
第8図 5号住居跡実測図

6号住居跡・7号住居跡

南側中央に切り合った状態で検出。6号住居跡が7号住居跡により切られる。

6号住居跡は長軸8m、短軸6.5m、床面積49m²を測る。隅丸方形形状を呈する。主柱穴は4隅に2本ずつの計8本柱。削平により壁高は10cm程度を残すだけで、住居跡中央及び南側に焼土を有する。北側には縦1.2m、横0.6m程度の長楕円形状の土壇を有する。遺物の出土はほとんど無い。

7号住居跡は長軸6.4m、短軸5.9m、床面積33m²を測る。隅丸方形形状を呈する。主柱穴は4本で焼土は中央、南に不定形土壇を有する。壁高10cm程度を残すのみで、遺物も少量である。



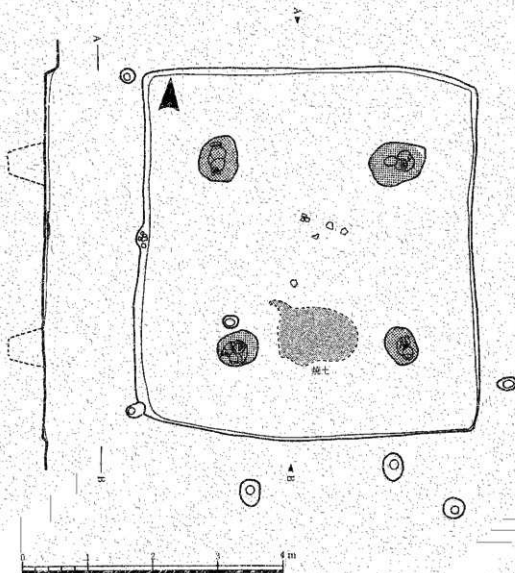
第9図 6・7号住居跡実測図

8号住居跡

住居跡は長軸5.5m、短軸5m、床面積26㎡を測る。方形状を呈し、5号住居跡と同時期と考えられる。

主柱穴は4本で、住居跡南側の外に近接して対をなす柱穴があり、5号住居跡同様、出入口の施設が想定できる。壁高は10cm程度で、焼土は南側柱穴間にある。

なお、当住居跡も柱穴内土器廃棄が行われており、主柱穴内全部で各々2～3個体の土器が出土している。詳細は後述する。

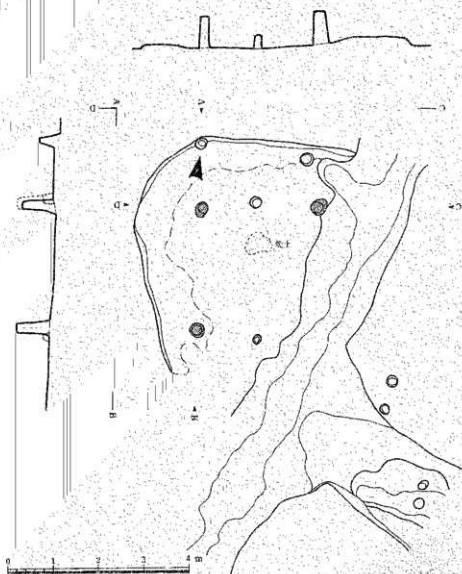


第10図 8号住居跡実測図

9号住居跡

遺跡の東南側に位置する。住居跡東南側は近世遺構及び近世削平工事等により大部分擾乱されており詳細は不明であるが、北西残存部から、隅丸方形状を呈する住居跡と考えられる。

主柱穴は4本と思われるが、北・南側柱穴間に各々1個の補助穴が確認できる。残土は北側中央部にある。住居跡は中央部が盛り上がり、わずかに凹んだ縁辺部は側溝的な意味をもつものと考えられる。



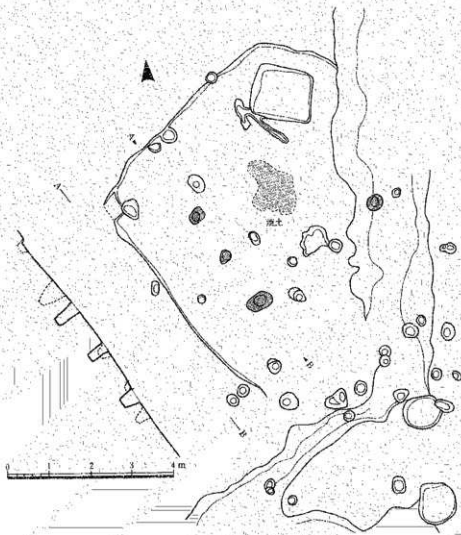
第11図 9号住居跡実測図

10号住居跡

9号住居跡の南に隣接する位置にあり、やはり東南側全てが近世溝構等により攪乱され消滅している。隅丸形状を呈し、長軸不明、短軸6.2mを測る。

主柱穴は明確ではないが、北東隅の近世イモ穴によって消滅したと考えられる柱穴を想定すると最少4本、また西側3本、東側2本の5本柱、あるいは最大8本柱が考えられる。

焼土は中央のやや北寄り、土趾は不明確ではあるが縦60cm、横60cm程度の不定形を呈し、焼土南側で検出した。



第12図 10号住居跡実測図

11号住居跡

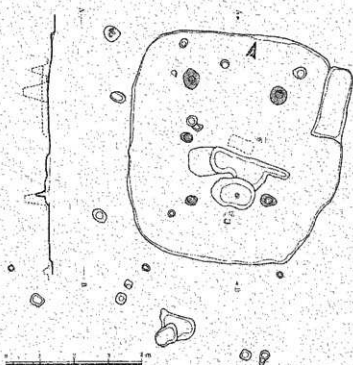
調査区の東端に位置する。

住居跡は長軸6.6m、短軸6.2m、床面積は34㎡で、隅丸形状を呈する。北東部隅は近世の縦2m、横1m程度の土壇により切断されている。

主柱穴は4本、あるいは西側3本、東側2本の計5本も考えられる。

焼土は中央、南側柱穴間に縦1.2m、横1m程度の楕円形状の土壇がある。

遺物の出土は少量である。



第13図 11号住居跡実測図

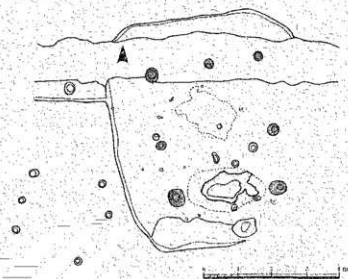
12号住居跡

調査区の東南部、11号住居跡と13号住居跡の中間に位置する。

住居跡北部は近世溝遺構により切断され、また、削平により東南部は柱穴を残すのみであった。

残存部より長軸6.7m、短軸5.7m、床面積30㎡以上の住居跡と考えられる。主柱穴は西側3本、東側3本、北側中1本の計7本が考えられる。

焼土は住居跡中央部にありさらに南側柱穴間に縦1.2m、横0.8m程度の不定形土壇があり、上面約2m幅に広がる灰土を検出した。



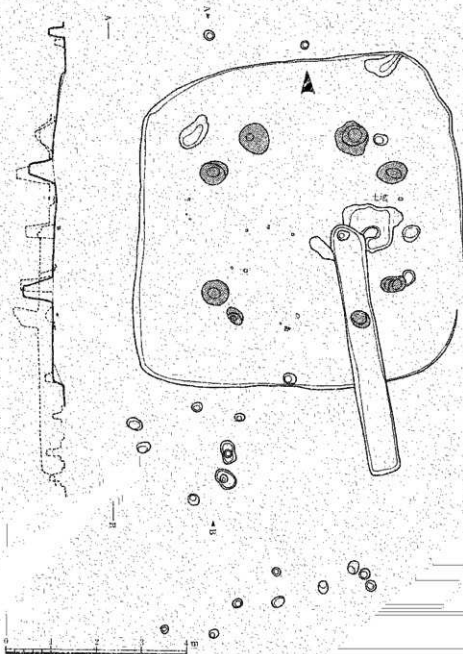
第14図 12号住居跡実測図

13号住居跡

調査区の東南隅に位置する。長軸7.2m、短軸7m、床面積47㎡を測る。隅丸方形形状を呈する。

主柱穴は住居跡コーナー側に各2本ずつの計8本である。焼土は検出できなかったが、東側柱穴間に縦1m、横1m程度の土塊状遺構が確認できるが、深さ数cmと非常に浅く、不明である。

住居跡東南部は近世イモ穴により切断されている。



第15図 13号住居跡実測図

近世溝遺構

調査区の東南側に丁字状に延びる。南北方向は両端が消滅している。

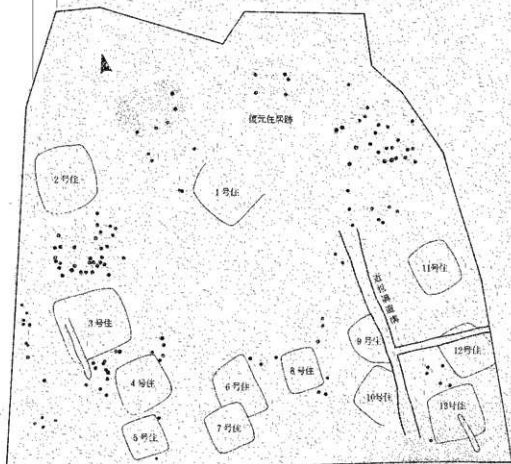
遺構は上場約2m、下場1m程度のU字溝で、深さ10cm～20cm程度と非常に浅く、削平により、南・北側端が消滅している。

溝遺構中はローム層混りの黒色土が包含されており、遺物も無く、後世に造営されたと考えられる。

柱 穴 群

遺跡全体が削平を受けており、わずかに壁高10cm～20cm程度を残して確認できる住居跡以外は、全て壁高を無くし、柱穴のみが残ったと考えられ、これら残存柱穴群はある程度ブロック状に固まり、点在する。このブロックから消滅住居跡の復元が可能である。

復元の結果、当住居跡群はボクス山状の地形の頂上付近を空白地帯とし、この中央広場的空白地帯を中心に、周辺を環状に取り囲む様に設営されていることが判明した。



第16図 柱穴群による住居跡復元想定図

遺構について

発掘調査により検出した遺構は、弥生時代終末期の住居跡（1号～4号住、6・7号住、9号～13号住）11軒、古墳時代初頭住居跡（5・8号住）2軒、柱穴群、近世溝遺構である。

遺跡は三方を浅い谷に囲まれたボウズ山状の台地上にある。北側に都松川、湧水点を有する。周辺部は既に今年度工事により削平、破壊されてしまったが、遺跡周辺は試掘調査及び分布調査が実施され、次の状況が把握できた。

遺跡南で数軒の同時期と考えられる住居跡を確認したほかは、西側に対峙する地区（日当西遺跡）で縄文時代各時期にわたる土器、石器を表採した。

（なお、日当西遺跡の表採遺物については、別章で紹介する。）遺跡東南部については、昭和55年度県営圃場整備事業に伴う試掘調査を実施したが、遺構は検出できず、結果的に弥生時代遺構が当発掘区に集中していたことが判明した。

柱穴の数と配置（第17図参照）

当遺跡の場合、住居跡の形体は大野川中・上流域の遺跡と異なり、下流域に多い円形に近い隅丸方形の住居跡が主体を占める。しかしながら主柱穴の配置等は共通点も多く、中・上流域の分類をそのまま参考にした。大野川流域で出土した弥生時代住居跡の主柱穴については1980年大野町教育委員会発行の「大野川の遺跡」に詳しい。

A類…柱穴を1本だけもつ

B類…柱穴を中央部に2本もつ

C類…4本柱で、住居跡の基本型と考えられる。

D類…C類の柱穴間に1本加え、計5本柱となる。

E類…3本柱が2列並ぶもの、計6本柱

F類…E類の配置に1本加わり、柱穴の並びが

「コ」の字になる。

G類…F類にさらに加わり、計8本を数える。

H類…2本単位で柱穴が、住居跡4隅にそれぞれ

配置される。8本柱

I類…3本柱が3列並ぶ

以上9分類されているが、当遺跡では1号住居跡

	形態	特徴	軒数
A		柱穴 1本	0
B		柱穴 中央に 2本	0
C		柱穴 4本	5
D		C類柱穴間に1本加わり 5本	2
E		柱穴 3本が2列に並び 6本	0
F		E類柱穴間に1本加わり 7本	1
G		F類柱穴間に2本加わり 8本	0
H		2本単位の柱穴が4ヵ所 8本	2
I		柱穴 3本が3列並び 9本	0

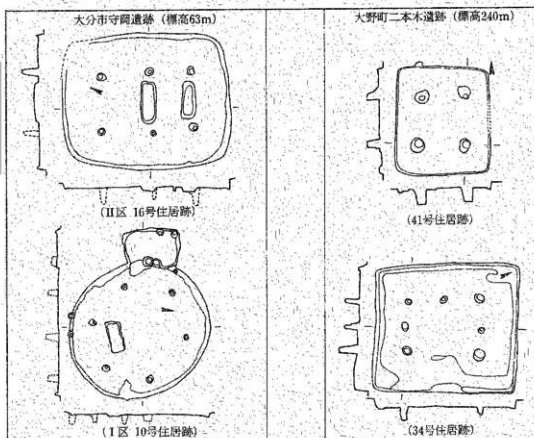
第17図 柱穴の数と配置

3号住居跡の円陣を組む柱穴以外は全て分類中に入る。具体的にはC類5軒、D類2軒、F類1軒、H類2軒、不明1軒であり、うちC類5軒について、2軒は時代が異なる。従って弥生時代終末期住居跡11軒は、特に片寄りもなく、むしろ各々がほぼ均等に設営されていることが判明した。

住居跡形態の地域的対比

大野川下・中・上流域において、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて爆発的に増大する遺跡の住居跡群について、その形態を概観すると、各遺跡毎にバラエティに富んだ形態を有しているが、それぞれ特徴を具備しているようである。

大分川の下流、大分平野の東南部にあたる標高63mの通称森岡山と呼ばれる独立台地があり、この台地上に弥生時代中・後期、および古式土師期、中世遺構等が検出された守岡遺跡がある。検出住居跡総数49軒、うち終末期32軒、古式土師期8軒を数えた。32軒の終末期住居跡は形態上から3分類できる。円形住居跡6軒、隅丸方形住居跡6軒、方形住居跡20軒であり、古墳時代住居跡8軒になると全て方形住居跡になる。



第18図 守岡遺跡と二本木遺跡の住居跡の対比

なお、終末期住居跡の内部施設は、炉跡を中央に備え、炉跡の南及び南側柱穴間に方形及び長方形を呈する土域を具備するといった特徴を有しているものが多い。

大野町二本木遺跡は、大野川の中流にあたる標高約 240 m の台地上に位置する。旧石器時代から古墳時代前期と幅広い時期の遺物を出土するが、主体は弥生時代後期、古墳時代前期である。検出住居跡総数 65 軒で、全て方形住居跡であり、内部施設を見ると、炉跡を有するもの約 1/4、土壇を有するもの約 1/6 を数える。

石井入口遺跡は、竹田市大字菅生、標高約 510 m の台地上に広がる、縄文時代から古墳時代にかけての大集落跡である。検出住居跡数約 200 軒を数え、大・中・小様々なサイズをもつ住居跡は全て方形である。

萩町の北西に位置する標高約 600 m の台地上に存在する古賀遺跡では弥生時代終末期の住居跡約 100 軒を検出したが、全て方形住居跡であった。

以上、大野川流域及び近辺の代表的な集落遺跡を下・中・上流域で抽出し比較して考えると、中・上流域と下流域に若干の差異を見出すことができる。

しかしながら、日当遺跡の場合、終末期住居跡 11 軒は全て円形に近い隅丸方形であり、古墳時代に入り、急速に小型化した方形住居跡に変る様相がうかがえ、また、内部施設についても、大分市内守岡遺跡に見られるように、炉跡を中央に設置し、さらに土壇を南側に配置する形態を継承しているが、全体的には退廃する傾向にあると思われ、土壇等は不定形状を呈し、浅いものが多い。これらから判断すると日当遺跡は比較的守岡遺跡に近い特徴を有しているが、若干の相違がありむしろ中・上流域と下流域の中間に位置づけできるものと考えられる。

しかしながら、これらは代表的集落遺跡のみの比較であるため、そのまま地域の比較と発展させるには危険をともなうが、日当遺跡の特徴的な住居形態は、その地理的位置、立地、時期等から今後類型資料の増加とともに再検討しなければならないと考える。

注 1 ……大分市教育委員会 「守岡遺跡」 1979

注 2 ……大野町教育委員会 「大野川の遺跡」 1980

注 3 ……竹田市教育委員会 「菅生台地と周辺の遺跡Ⅵ」 1981

注 4 ……萩町教育委員会 「萩台地の遺跡Ⅴ」 1980

2. 出土遺物

a. 土 器

調査により出土した土器は、弥生時代中期、後期、古墳時代前期の3時期にかかるもので、中期と考えられる下城式タイプの数点の土器は2号住、4号住、6号住、11号住床面直上の出土ではあるが、攪乱による混入の可能性が高い。

後期土器は、一部後期中葉が含まれるが大部分は後葉のものと考えられる。

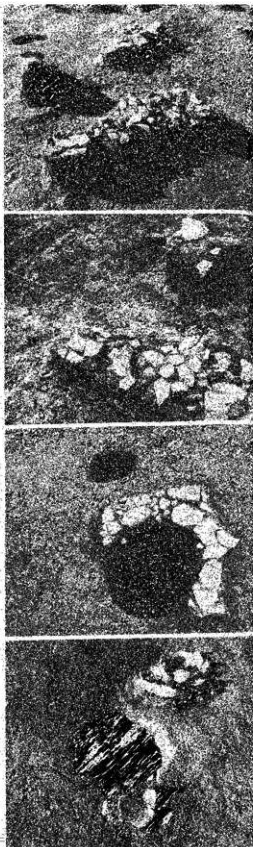
古墳時代前期土器は、5号住、8号住から出土したもので、布留、庄内式に併行するものと考えられる。

当遺跡検出遺構内からの出土土器は小片が多いが、2号住、5号住、8号住等は、甕、壺、高坏がセットで出土している。品種別による出土率は、甕61.3%、壺27.4%、高坏8.1%、鉢3.2%で、甕が壺の2～3倍の出土率を示す。これは大野川中流域の松木遺跡^{注1}の出土率とほぼ一致した比率であり、また、甕、壺が出土土器の90%以上を占める点等、当流域に存在する集落内での土器利用には共通点が多い。

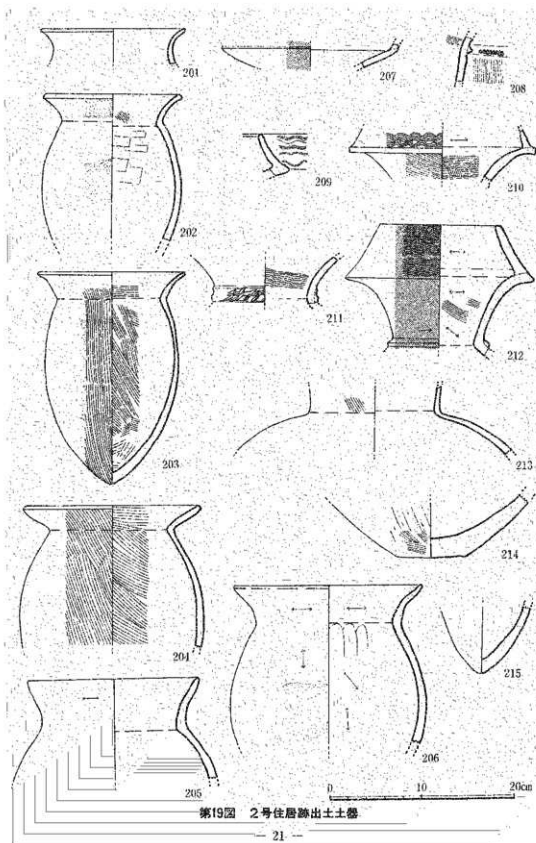
しかし、住居跡別の保有状況は出土率とは一致せず、比較的良好な残存状態を呈していた2号住で、甕47%、壺47%、坏6%、4号住で甕57%、壺43%、5号住で甕50%、壺40%、鉢10%と甕と壺がほぼ同率の保有状況を呈する住居跡や、柱穴内廃棄といった特殊な状況で好例ではないが、8号住の場合では甕80%、壺13%、坏7%と圧倒的に甕が多く見られるケースもある。

注1 大野町教育委員会「大野原の遺跡」1980

松木遺跡では甕2.49%、壺8.07%、高坏0.11%、鉢0.06%の出土率である。



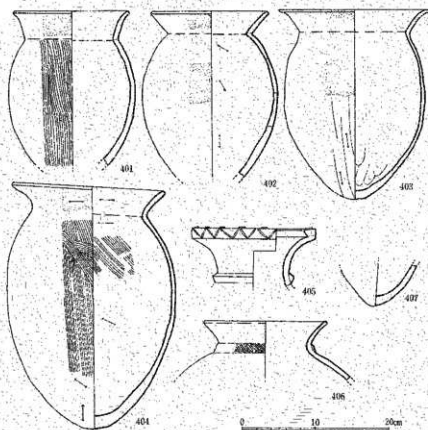
土器出土状態



第19圖 2号住居跡出土土器

第1表 日当遺跡土器観察表

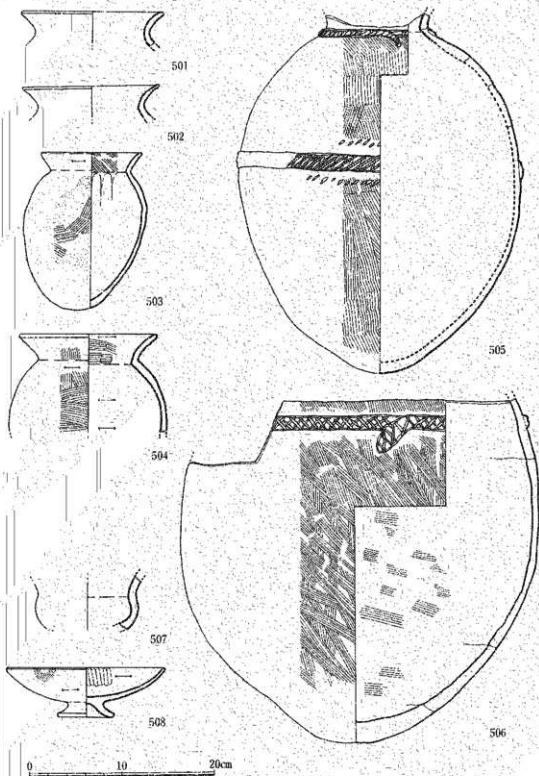
番号	器種	通図番号 図版番号	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
201	甕	第19図	2号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	砂粒混入	口縁部はゆるやかに外反する	内外面ともナデ	口縁部のみ
202	甕	第19図	2号住居跡	表 暗褐色 裏 黄褐色	砂粒混入		外面ナデ 内面口縁部は刷毛目の ちヨコナデ胴部ヘラ削り	底部欠失 スス付着
203	甕	第19図	2号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	砂粒混入		外面は口縁部ヨコナデ で他は刷毛目 内面も同様	完成品 スス付着
204	甕	第19図	2号住居跡	表 暗褐色 裏 灰褐色	比較的大きな砂粒混入	口縁部は中位でやや肥厚する	内外面全体に刷毛目	底部欠失
205	甕	第19図	2号住居跡	表 茶褐色 裏 灰褐色	砂粒混入		内外面ともナデ	
206	甕	第19図	2号住居跡	表 暗褐色 裏 茶褐色	砂粒混入	胴部の盛りが比較的大きい	外面口縁部ヨコナデ 胴部はヘラズリ底が 縦方向に残る内面ナデ	底部欠失 スス付着
207	高坏	第19図	2号住居跡	表 全面 丹塗り 裏 黒褐色	細砂粒混入 非常に堅い		内外面ともヘラミガキ	
208	甕	第19図	2号住居跡	表 暗褐色 裏 黄褐色	細砂粒混入 非常に堅い	比較的大きなキザミ目を有する 突帯	外面タナ方向に刷毛目 内面ヨコ方向に刷毛目 (部分的)あとはナデ	下破式 土器
209	甕	第19図	2号住居跡	表 茶褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入		外面極細波状文 内面ナデ	
210	壺	第19図	2号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入		外面極細波状文 頸部は刷毛目 内面口縁部ヨコナデ 頸部刷毛目	
211	壺	第19図	2号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	頸部にキザミ目 貼付突帯	外面ナデ 内面刷毛目のちナデ削り	
212	甕	第19図	2号住居跡	表 全面 丹塗り 裏 茶褐色	細砂粒混入 非常に堅い		外面全体に丹塗り、口 縁部ヨコ、頸部タテに 塗りわけ 内面部分的に刷毛目 が残るが、ナデが主体	口縁部のみ
213	壺	第19図	2号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	砂粒混入 やや荒い	最大径が胴部上 位にあり、球状 を呈す	外面ヘラミガキ 内面ナデが主体	
214	甕?	第19図	2号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	平底	外面ヘラズリ 内面割落がひどいがナ デ上げ	底部のみ
215	甕?	第19図	2号住居跡	表 灰褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入	尖底気味のやや丸底	内外面ともナデ	内面スス 付着



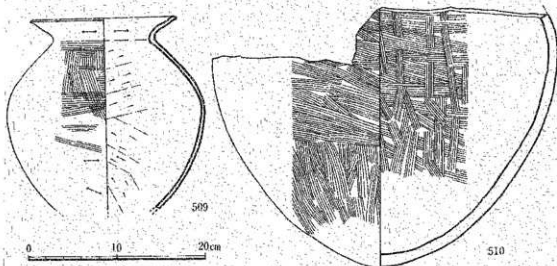
第20図 4号住居跡出土土器

第2表 日当遺跡土器観察表

番号	器種	原図番号 図版番号	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
401	壺	第20図	4号住居跡	表 暗褐色 裏 黄褐色	砂粒混入 やや荒い	口縁部はゆるやかに外反	外面口縁部ヨコナデ 胴部縦方向に刷毛目 内面荒く調整不明	底部欠失 スス付着
402	壺	第20図	4号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	口縁部が「く」の字状に強く外反する	内外面とも仕上げはナデ	底部欠失 スス付着
403	壺	第20図	4号住居跡	表 暗褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入 良 好	胴部が薄く、口縁部は中位で肥厚し「く」の字に外反する	外面ヘラ削りのモチナデ 内面ナデ上げ	完成品 スス付着
404	壺	第20図	4号住居跡	表 黒褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入		外面口縁、底部以外縦方向の刷毛目 内面ヘラナデで部分的に刷毛目	完成品 スス付着
405	壺	第20図	4号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒若干 混入	口縁部に貼付円帯が16個確認できる	内外ともナデが主体	口縁部のみ
406	壺	第20図	4号住居跡	表 淡黄褐色 裏 黄褐色	砂粒多く 混入 やや荒い	胴部が強く張り「く」の字状に外反する口縁部のつけ根にキザミ目突柄	内外ともナデが主体	胴部 口縁部のみ
407	壺?	第20図	4号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	やや尖底気味の丸底	内面ヘラケズリ	底部のみ



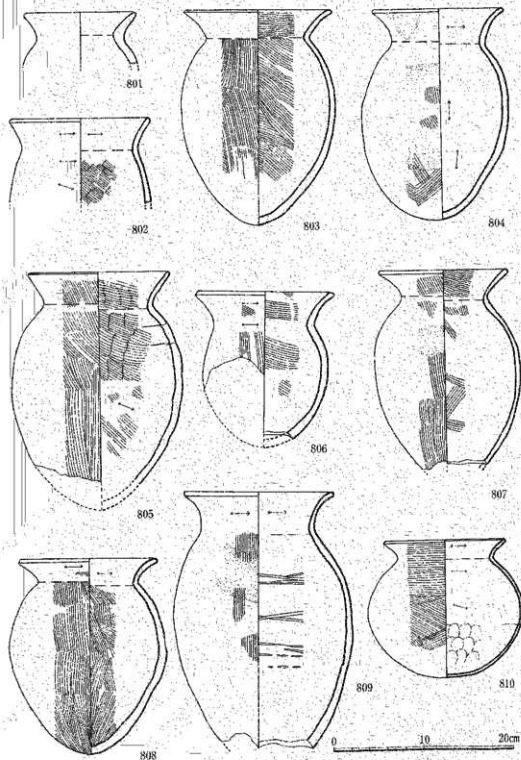
第21图 5号住居跡出土土器



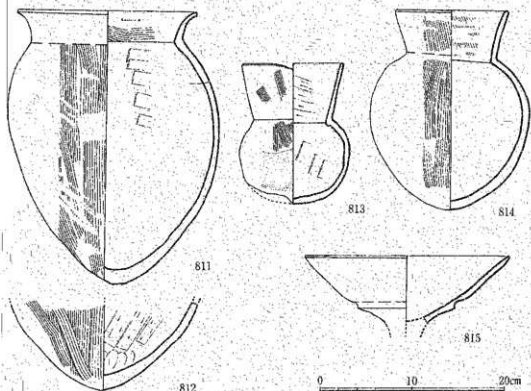
第22図 5号住居跡出土土器

第3表 日当遺跡土器観察表

番号	器種	断面番号 図版番号	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
501	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	口縁部はゆるやかに外反	内外面ともナデ	口縁部のみ
502	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入		内外面ともナデ	口縁部のみ
503	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒多く混入 荒い	ややイビツ	外面割落がひどく部分的に刷毛目残る 内面	完形品 スス付着
504	壺	第21図	5号住居跡	表 黒褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	口縁部が「く」の字状に比較的強く外反	外面は縦横の刷毛目が入るが胴部口縁部ナデ消し内面口縁部はヨコ方向の刷毛目胴部はケズリ	底部欠失 スス付着
505	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 灰褐色	細砂粒若干混入 非常に良好	胴部と胴部にナゲミ目突帯 胴部突帯はクシ状施文具でナゲミを入れる	外面底部を除き全面に刷毛目	口縁部 欠失 スス付着
506	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 茶褐色	砂粒若干混入	胴部ナゲミ目突帯まで残存 輪痕み態で意図的に除去?	外面は斜方向の刷毛目が底部以外に施される 内面は割落がひどく部分的に刷毛目残る	下胴部のみ スス付着
507	壺	第21図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 黄褐色	黒碧母小粒を多く含む		内外面ともナデ	胴部のみ
508	瓶罍杯	第21図	5号住居跡	表 淡黄色 裏 淡黄色	細砂粒混入 やや荒い	胴部先端は磨減著しく詳細は不明	外面全体はナデ 内面は口縁部付近ヘラケズリあとはナデ	完形品 燈明皿
509	壺	第22図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 黄褐色	細砂粒混入 非常に堅い	非常に薄い層をもち、口縁部は中位で肥厚「く」の字状に外反する	外面胴部上半に縦横の刷毛目が集ち内面口縁部ナデ胴部はケズリ	底部欠失 スス付着
510	壺	第22図	5号住居跡	表 赤褐色 裏 黄褐色	細砂粒混入	輪痕み部で意図的に除去?	外面は縦横に刷毛目内面は横方向の刷毛目が主体となりのちに部分的に縦方向の刷毛目	下胴部のみ



第23图 B号住居跡出土土器

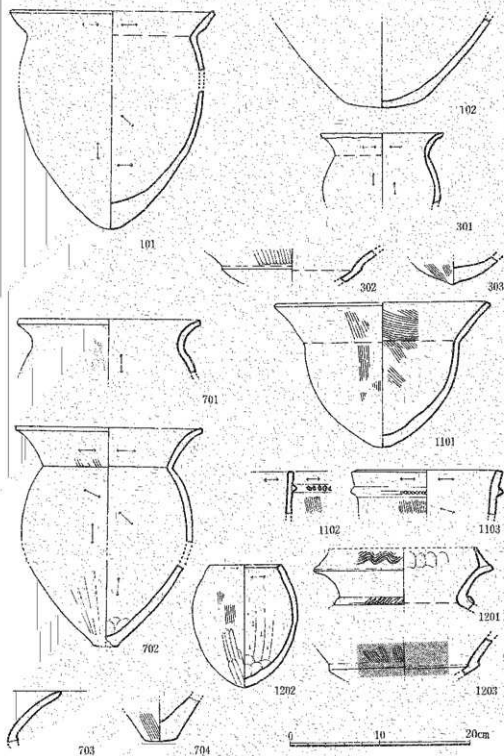


第24図 8号住居跡出土土器

第4表 日当遺跡土器観察表

番号	種類	断面図 断面図	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
801	甕	第23図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	厚く、ゆるやかに外反する口縁部をもつ粗製甕	内外面とも刺落がりどく、調整痕不明	底部欠失
802	甕	第23図	8号住居跡	表 暗褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入	口縁部はゆるやかに外反胴部の張り出し位にある	外面はヨコナデが主体内面は口縁部ヨコナデ胴部に刷毛目残る	底部欠失
803	甕	第23図	8号住居跡	表 暗褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入 非常に堅い	胴部に明瞭な縁をもって口縁部が外反する	外面は口縁部ヨコナデ胴部はタテ方向の刷毛目内面は口縁部とも刷毛目で一部ナデ	完形品 スス付着
804	甕	第23図	8号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	小砂粒混入 やや荒い	ややイビツな小型粗製甕	外面はタテ方向の刷毛目胴部はタテ方向に刷毛目が入るが大部分ナデ消し内面はヘラによるナデ	完形品 スス付着
805	甕	第23図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	口縁部比較的ゆるく外反	外面は全体に刷毛目部分的にヨコナデ内面は上半部は非常にいい刷毛目下部はナデ消される	底部欠失 スス付着
806	甕	第23図	8号住居跡	表 暗褐色 裏 暗褐色	細砂粒混入 非常に堅い	厚く小型の粗製甕	外面はタテ方向の刷毛目口縁部付近ナデ消し内面はヨコ方向の刷毛目底部付近はナデ	底部欠失

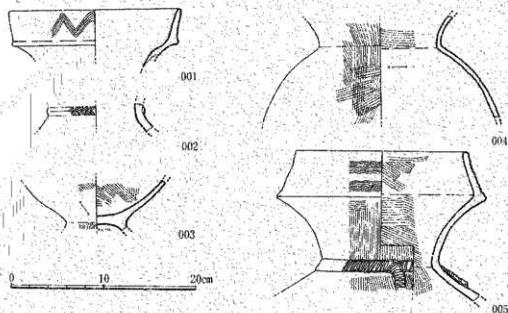
番号	品種	種別番号 図版番号	出上住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
807	甕	第23図	8号住居跡	表 暗褐色 裏 暗褐色	砂粒混入	最大径は胴中位 にあり、底部は 欠失しているが 丸底(尖底気味) と思われる	外面はタテ方向に刷毛 目部分約にヨコナデ 内面は口縁部全体に刷 毛目 胴部は大部分ナデ消し 内外面とも胴部はタテ 方向の刷毛目 口縁部はヨコナデ	底部欠失 スス付着
808	甕	第23図	8号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	砂粒混入 黒雲母混入 非常に堅い	口縁部が強く外 反する	外面は口縁部ヨコナデ 胴部には非常に細かい 刷毛目が部分的に残る 内面へう割り、へう痕 が顕著に残る	完形品 スス付着
809	甕	第23図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入	口縁部はゆるや かに外反する	外面は口縁部ヨコナデ 胴部には非常に細かい 刷毛目が部分的に残る 内面へう割り、へう痕 が顕著に残る	底部欠失 スス付着
810	甕	第23図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入 非常に堅い	口縁は短かく外 反し胴は球形 底部は丸底 口縁部中程は少 少肥厚する	外面は口縁部ヨコナデ 胴部はタテ方向に大き な刷毛目 内面口縁部はヨコ方向 刷毛目のちナデ 胴部へう割りのちナデ 外面タテ方向の刷毛目 内面はへう割り 底部は指状	完形品 スス付着
811	甕	第24図	8号住居跡	表 黄褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入	最大径が胴部上 位にありやや短 か目の口縁部は 内面に明瞭な縁 をもち外反する	外面は口縁部ヨコナデ 胴部はタテ方向に大き な刷毛目 内面口縁部はヨコ方向 刷毛目のちナデ 胴部へう割りのちナデ 外面タテ方向の刷毛目 内面はへう割り 底部は指状	完形品 スス付着
812	甕	第24図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 灰褐色	砂粒混入		外面口縁部は部分的に 刷毛目が残るが、全体 はへう割り(タテ方向) 内面は斜方向にへう割 り	底部のみ
813	甕	第24図	8号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	小委丸底表	外面全体にタテ方向の 刷毛目 底部はへう割り 内面口縁部刷毛目のち ナデ消し 胴部へう割りのちナデ 外面へうにより割り 内面も同様	底部欠失
814	甕	第24図	8号住居跡	表 暗褐色 裏 茶褐色	砂粒混入	口縁部はやや外 反気味に直口す 胴は球形に張り 底面はやや丸底	外面全体にタテ方向の 刷毛目 底部はへう割り 内面口縁部刷毛目のち ナデ消し 胴部へう割りのちナデ 外面へうにより割り 内面も同様	完形品 スス付着
815	高 杯	第24図	8号住居跡	表 灰褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入		外面全体にタテ方向の 刷毛目 底部はへう割り 内面口縁部刷毛目のち ナデ消し 胴部へう割りのちナデ 外面へうにより割り 内面も同様	底部欠失



第25図 その他の住居跡出土土器

第5表 日当遺跡土器観察表

番号	器種	採掘番号 図版番号	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
101	甕	第25図	1号住居跡	表 茶褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入	最大径が口縁部にある	ナデが主体であるが底部付近はケズリ痕が残る	復元完形
102	甕?	第25図	1号住居跡	表 茶褐色 裏 淡黄色	比較的大きな砂粒混入	平底気味の丸底	外面ナデ上げ 内面剥落ひどく調整不明	
301	甕	第25図	3号住居跡	表 黒褐色 裏 赤褐色	砂粒混入		内外ともナデ	底部欠失
302	高杯	第25図	3号住居跡	表 灰褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入		内外ともヘラミガキ	
303	甕?	第25図	3号住居跡	表 灰褐色 裏 灰褐色	砂粒多量に混入	わずかに尖底になる	外面わずかに刷毛目が残る	底部のみ
701	甕	第25図	7号住居跡	表 暗褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入		内外ともナデ	スス付着
702	甕	第25図	7号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	最大径が口縁部にあり、底部は丸底気味の平底	外面へラ削りのちナデ 内面指圧のちナデ	復元完形 スス付着
703	甕	第25図	7号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	頸部に貼付突起	外面ヨコナデ 内面へラミガキ	
704	甕?	第25図	7号住居跡	表 暗褐色 裏 赤褐色	比較的大粒の砂粒混入	平底	外面へラケズリのち刷毛目 内面指圧のちナデ	
1101	鉢	第25図	11号住居跡	表 赤褐色 裏 赤褐色	砂粒混入	口縁部はラップ状に大きく外反、底部はわずかに平底	外面刷毛目のちナデ消し 内面も同様	完形品
1102	甕	第25図	11号住居跡	表 黒褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入	口縁部がやや外反	キザミ目突起以下に縦方向刷毛目あとはナデ	下城式土器
1103	甕	第25図	11号住居跡	表 黒褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入	口縁部直口	キザミ目突起以下に縦方向刷毛目	下城式土器
1201	甕	第25図	12号住居跡	表 淡青色 裏 淡黄色	黒変母土片混入	口縁部を欠失、頸部にキザミ目貼付突起	口縁はナデのあと標識状文 内面口縁部指圧のちナデ	
1202	鉢	第25図	12号住居跡	表 灰褐色 裏 灰褐色	細砂粒混入	口縁部が内施、底部は尖底気味の丸底	外面は部分的に刷毛目が残るが全体はへラ状工具によるミガキ 口縁部は指ナデ 内面は指圧のちナデ	完形品
1203	高杯	第25図	12号住居跡	表裏とも全面丹塗り	細砂粒混入、非常に堅い	外面刷毛目のち部分的にナデ消し、内面ナデ	外面刷毛目のち部分的にナデ消し、内面ナデ	



第26図 日当遺跡表土器

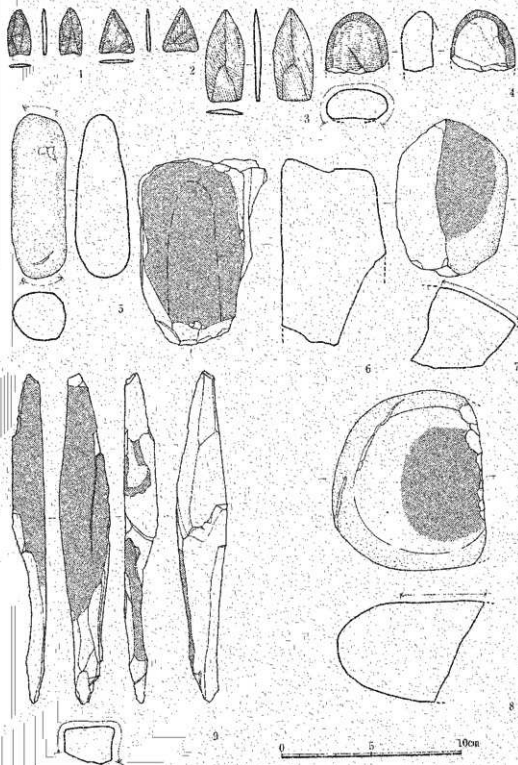
第6表 日当遺跡土器観察表

番号	器種	採掘層位 図版番号	出土住居跡	色 調	胎 土	形態の特徴	手法の特徴	備 考
001	壺	第26図	表 採	表 黄褐色 裏 黄褐色	細砂粒混入	口縁部帯横波状文	内外ともヨコナデ	
002	壺	第26図	表 採	表 赤褐色 裏 赤褐色	細砂粒混入	頸部キザミ目貼付突帯	内外面ともナデ	
003	胴付鉢?	第26図	表 採	表 黄褐色 裏 黄褐色	砂粒混入 荒い	胴付	外面剥落がひどく部分的に刷毛目が残る 内面全体に刷毛目	
004	鉢?	第26図	表 採	表 暗褐色 裏 灰褐色	砂粒混入 荒い	口縁部帯横波状文 頸部キザミ目貼付突帯	外面口縁部ナデあとは内外面とも刷毛目	
005	壺	第26図	表 採	表 暗褐色 裏 茶褐色	細砂粒混入 非常に堅い	口縁部欠失 胴部の最大径が中位にあり球形になる	外面クタクキのち刷毛目 内面頸部に刷毛目以外はナデ	スス付着

b. 石 器

住居跡より出土した石器は磨製石鏃3点、磨石3点、砥石2点、ハンマーストーン1点の計9点。——
といった程度で、同遺物からは何も考察できる状況ではない。——

遺構の削平による遺物の損失が最大の原因と考えられる。——



第27図 日当遺跡出土石器実測図

第7表 出土石器調査表

単位: cm

遺物No.	器種名	出土遺構	現存長	現存幅	厚さ	石 材	備 考
1	磨製石鏃	13号住居跡	2.1	1.2	0.2	蛇紋岩	先端わずかに欠失、凹基
2	磨製石鏃	13号住居跡	2.3	1.9	0.2	蛇紋岩	先端わずかに欠失、凹基 幅広二等辺三角形
3	磨製石鏃	13号住居跡	5.1	2.2	0.4	蛇紋岩	未製品? 平基
4	磨(削)石?	13号住居跡	3.4	3.5	1.7	緑泥片岩	半欠品 裏面は彫理による剥落
5	敲打石	11号住居跡	9	3	2.9	安山岩	両先端に敲打痕跡 ハンマーストーン?
6	砥石	3号住居跡	10.3	7.1	5.7	硬質砂岩	半欠品 1面のみ利用
7	磨石	2号住居跡	8.7	6.1	4.4	硬質砂岩	欠失
8	磨石	13号住居跡	10	8.3	5.5	安山岩	欠失 全体が割れているが、特に中央部が顯著
9	砥石	4号住居跡	18.2	2.8	2.1	蛇紋岩	裏面剥落 カップシ形に整形? されている

第8表 土器片加工品分類表

分類	形態	形態の特徴	個数	%	遺跡名
A類		全周が研削(磨製?)され、半月形を成する土器片加工品の代表形	216	59	二本木 S
			36	25	松本 S
			11	48	日当 S
A類		A類と同形であるが、底部の研削(磨製?)が見られない。	70	19	二本木 S
		弧部のみ加工。	25	17	松本 S
			3	13	日当 S
B類		A類に近いが、平面片方が尖る。	8	2	二本木 S
		尖部部に加工が集中	60	42	松本 S
			1	4	日当 S
C類		形状はA類であるが、弧部の終部の近い位置にノッチを有する。	10	3	二本木 S
			0	0	松本 S
			1	4	日当 S
D類		A類の形態の底部に大・小のキザミを有する。	13	4	二本木 S
		C類のノッチを有する	0	0	松本 S
		形状も多い	3	13	日当 S
E類		A類を半折した形態のもので、再利用の可能性がある。	9	2	二本木 S
			9	6	松本 S
			1	4	日当 S
F類		不定形であるが、刀形及び台形に近い形態。	7	2	二本木 S
			8	5	松本 S
			2	10	日当 S
G類		多角を有し、円形に近い形態。	31	9	二本木 S
			6	5	松本 S
			1	4	日当 S

※土器片加工品は未だ用途が不明であり、形態を要するための加工(研削)が、使用した結果によるもの(他属)が限定していない。

※土器片加工品の分類は、大野町教育委員会「大野原の遺跡」1980を引用した。

c. 土器片加工品

土器片加工品については、これまでその形態より、メンコ状土製品と呼称されていたが、当品のもつ特徴及び想定される用途等から判断して改称した。

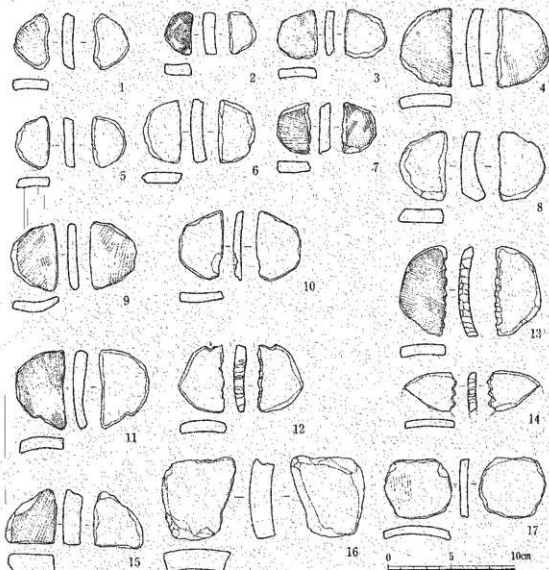
当品は県内では、これまで大野川中流域にあたる大野町等に集中して出土し、上流域である竹田市、萩町、さらに平野部、あるいは下流域にあたる市内等では少量の出土が見られる。しかしながら分布状況を見ると、県内では現在のところ、大分川、大野川流域でしか出土しておらず、河川に関連した、当地域独特の産物として把握できる。

日当遺跡から出土した土器片加工品は総数23点であった。(ちなみに、中流域の大野町二本木遺跡では欠損品も含めて565点である。)

これら23点の土器加工品は形態より8分類できる。

8分類中、全体の約50%を占めるのがA類で、この傾向は大野町二本木遺跡と類似している。

日当遺跡は大野町松本遺跡、岡町二本木遺跡と比較すると土器片加工品の形態分類別保



第28図 土器片加工品実測図

第9表 土器片加工品一覧表

単位: cm

遺物No.	分類名	出土遺跡	現存長	現存幅	厚	3	使用土器	備	考
1	A類	1号住居跡	4.4	2.7	0.8		甕	刷毛目残る	胸部使用
2	A類	3号住居跡	3.5	2.1	1		甕	波状文有	二重口縁の口縁部使用
3	A類	13号住居跡	3.8	3.3	0.7		甕	刷毛目残る	胴部使用
4	A類	6,7号住居跡	6.2	4.3	1		甕	刷毛目残る	胴部使用
5	A類	1号住居跡	4.2	2.7	0.7		甕	スス付着	
6	A類	6,7号住居跡	5	3	0.9		甕		
7	A類	13号住居跡	4	2.7	0.9		甕	表裏に刷毛目残る	

遺物№	分類名	出土遺構	現存長	現存幅	厚さ	使用土器	備	考
8	A類	1号住居跡	5.5	3.6	1.6	甕	口縁部使用	
9	A'類	2号住居跡	5.4	3.7	0.7	甕	表裏に刷毛目残る	口縁部使用
10	A'類	13号住居跡	5.5	3.5	0.7	甕	口縁部使用	
11	C類	5号住居跡	6.2	3.9	0.9	甕	片面に刷毛目有	ノッチ有
12	C・D類	2号住居跡	5.3	3.7	0.9	甕	ノッチ有	
13	D類	13号住居跡	7.1	3.7	0.8	甕?	片面に刷毛目有	
14	D類	1号住居跡	3.1	4.2	0.6	甕?	スス付着	
15	E類	6,7号住居跡	4.3	4	1.4	甕	片面に刷毛目有	
16	F類	12号住居跡	6.3	5.9	1.7	甕		
17	G類	13号住居跡	4.6	5.4	0.7	甕?	片面に刷毛目有	

有率に偏向性が見られる。この3遺跡では、松木遺跡の場合、C・D類が皆無であり、逆にB類が高い出土率を占める等、明らかに他の2遺跡間に差異があることがわかる。この差異が地域差によるものか、時期差によるものか明確ではない。

ただ、3遺跡間では松木遺跡が最も古く、同時期を土器片加工品の出現時期と考えると特にC・D類の形態が松木遺跡以後に出現した形態と考えられる。

土器片加工品の用途については、完形品時の係付着部がそのままの状態に残っており、周辺部が磨滅するほど使用したとは考えられない。また、土器そのものの強度の点から考慮しても対象物の限定は避けられない事等、当品の用途を工具とするには疑問が残る。

素材には主として甕形土器が利用されているが、若干壺も見られる。ただし壺の場合、二重口縁土器では口縁部をそのまま利用したケースが多く見られる。

注1……大野町における土器片加工品の出土遺跡は、二本木遺跡、松木遺跡で、二本木遺跡では565点（うち完形品364点）、松木遺跡では186点（完形品144点）の出土があった。

大野町教育委員会 「大野町の遺跡」昭和55年3月

注2……竹田市では、小園遺跡、石井入口遺跡等で出土しているが、いずれも少量である。

竹田市教育委員会 「舊生台地と周辺の遺跡」Ⅳ 昭和53年3月

竹田市教育委員会 「舊生台地と周辺の遺跡」Ⅵ 昭和56年3月

注3……古賀遺跡で若干出土

古賀町教育委員会 「舊生台地の遺跡」Ⅴ 昭和55年3月

注4……多武尾遺跡から若干出土

多武尾遺跡は大野川下流域にある弥生時代終末期の集落跡で、削平により住居跡の残存状況は不良であるが、溝遺構は良好で、溝中より大量の土器が出土した。なお、小銅鐸も出土している。

注5……第8表参照

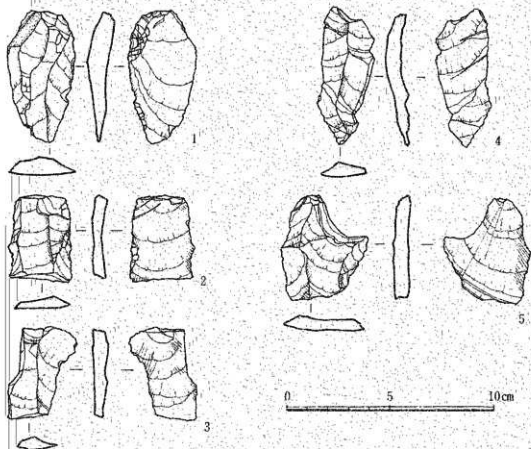
なお、土器片加工品の分類は（大野町教育委員会所載「大野町の遺跡」昭和55年3月）の分類に従った。

d. 旧石器時代の遺物

野津町では石器の素材を豊富に産出する大野川の支流である野津川を中心に旧石器文化が栄え、台地上いたる所に遺跡が存在する。菅無田、新生、鍋田原、田良原、土橋遺跡等が著名である。

当遺跡から出土した旧石器は全て3号住居跡から検出したもので、住居跡造営の際にローム層攪乱により露出したものと考えられる。

遺物は全てホルンフェルス素材とする剥片であり、縦長剥片を主体とする。



第29図 旧石器時代石器実測図

表10 旧石器時代石器観察表

単位: cm

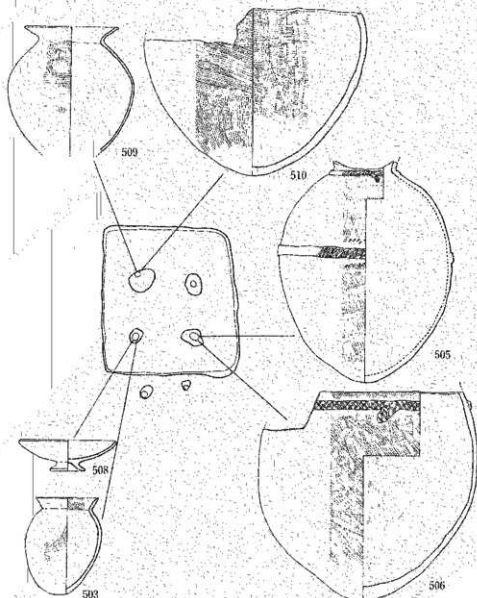
遺物No.	形態名	出土遺構	現存長	現存幅	厚さ	石 材	備 考
1	二次加工ある縦長剥片	3号住居跡	5.3	3.3	0.9	ホルンフェルス	自然面残る、側辺1部に2次加工
2	二次加工ある縦長剥片	3号住居跡	4.1	3	0.6	ホルンフェルス	折損、側辺1部に2次加工
3	縦 長 剥 片	3号住居跡	4.5	2.7	0.7	ホルンフェルス	
4	縦 長 剥 片	3号住居跡	6.6	2.5	0.7	ホルンフェルス	打面を欠く
5	不 定 形 剥 片	3号住居跡	5	4.2	0.7	ホルンフェルス	

V 考 察

1. 柱穴内遺物廃棄について

この項で言う柱穴内の遺物廃棄とは、住居跡を廃棄する段階（あるいはした段階）で、柱抜き取り後に、柱穴内に完形品か、それに近い使用不可能な土器が廃棄（安置^註）された状態を指す。当遺跡では、5号住居跡、8号住居跡が該当する。この2住居跡はいずれも時期的には、古墳時代初頭にあたり、やや小型の方形堅穴住居である。

5号住居跡は主柱穴4本で、うち3本について、各々2個体の土器が検出できた。



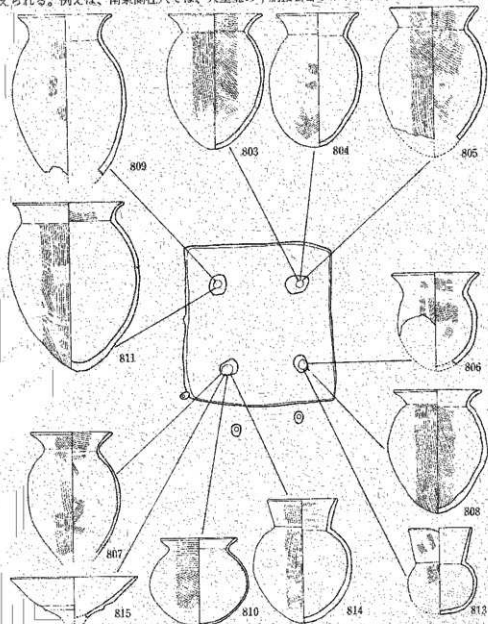
第30図 日当遺跡5号住居跡柱穴内廃棄土器出土状況

8号住居跡は5号住居跡と全く類似した住居跡であるが、主柱穴4本全てから土器を検出した。北西側柱穴から2個体、北東側3個体、南西側4個体、南東側で3個体を確認した。(第31図参照)

土器出土状況

柱穴内土器出土状態を細かく観察すると、5号、8号住居跡では全く異なる埋納の方法がとられている事がわかる。

5号住居跡の場合、まず各々2個体ずつ検出できるが、それぞれ意図的に組み合わせて安置したと考えられる。例えば、南東側柱穴では、大型甕の中胴接合部より、下胴部のみを利用し、柱穴内



第31図 日当遺跡8号住居跡柱穴内廃棄土器出土状況

に入れ、さらに安置した下胴部内に口縁部のみを除去した同タイプのやや小型の甕を挿入した状態である。北西側柱穴も同様であるが、南西側柱穴では甕形土器に低脚杯を覆せる様に置いている。

これらの状態は単なる廃棄とは言えず、明らかに何かを意図した結果の安置と考えた方が妥当と思われる。

8号住居跡の検出土器は圧倒的に甕形土器が多く、各柱穴内土器の出土状態も明らかに5号住居跡と差異が見られる。具体的には、各柱穴内土器の数量、あるいは土器の選択には意図的な面も窺えるが、いわゆる安置とは様相を異にした状態であった。従って、この場合を意図的な廃棄で表現した。

県内における柱穴内廃棄例

県内では近年大規模な弥生時代の集落跡の発掘調査が急速に進み、当時の社会風俗等が徐々に解明されつつある。その中の1つが柱穴内廃棄と思われ、大野川を中心とする各遺跡で、その頻例が認められる。

しかしながら、これら頻例はいずれも住居跡1軒につき1個だけが廃棄されたもので、日常遺跡に見られる大量廃棄例は皆無であった。

県内柱穴内廃棄例一覧

	市町村名	遺跡名	出土住居跡	住居跡の形状	主柱穴	出土柱穴	出土土器	時 期
1	大分市	守岡遺跡	1区23号住	円形?	不 明	不 明	壺	弥・中
2	大野町	松木遺跡	第3B-a b号住	方形	2本改竄 で5本	北西側	甕	古・初
3	大野町	松木遺跡	第14号住	方形	2 本	西 側	広口壺	弥・終
4	荻 町	古賀遺跡	91号住	方形	7 本	南 側	甕	弥・終
5	荻 町	古賀遺跡	102号住	長方形	6 本	北西側	甕	弥・終
6	荻 町	中山遺跡	9 号 住	方形	8 本	北東側	壺	古・初

上記の一覧表より、以下の問題が提起できる。

1. 県内では柱穴内廃棄が実施された地区は限定できる。(大野川下・中・上流周辺地区)
1. 廃棄土器より判断して、当風習が、埋葬等を意図したものではない事。
1. 土器廃棄を実施する柱穴がある程度、意図的に選択されている事。(北と西方向に集中する傾向が見られる)
1. 当風習が、住居跡廃棄時に実施される祭祀的意義が大きい。

これら問題点については頻例も少なく、未だ断定できる事は一つもないが、今後調査が進むにつれ、頻例の増加と、問題の解決が期待できる。

(牧 尾)

注1 荻町教育委員会「荻台地の遺跡Ⅴ」1980

注2 高橋 徹氏の御教示による。昭和56年度発掘調査
昭和57年3月「荻台地の遺跡Ⅵ」

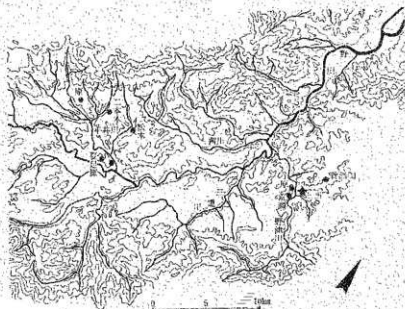
VI ま と め

九州中央部に位置する阿蘇火山は、その堆積物を広大な範囲にのこし、四方の流域に典型的な火山性台地を形成している。その最も顕著な例が西側では白川流域であり、東側は大野川流域である。これらの内陸部に発達する台地が、弥生時代集落の形成に密接にかかわっていることが近年の一連の調査によって明らかにされつつある。すでに熊本県においても谷頭遺跡^{28.1}の調査のあと、九州内陸部では始めての大規模な環溝集落である西弥護免遺跡^{28.2}のほぼ全域が調査され、阿蘇西麓部における弥生時代集落の実態解明に大きく寄与した。

一方阿蘇東麓部にあたる大野川流域では、昭和50年以降の発掘調査によって、竹田市・直入郡 荻町（上流域）、大野郡大野町（中流域）を中心に弥生時代後期～終末期を主体とする大規模な集落跡が多数明らかにされてきた。これは、それまで空白地とされていた同流域の弥生文化を一気に埋める程のものであり、またその集落形態、家屋構造、農業生産形態等の問題で重要な資料を提示するとともに、九州内陸部における弥生文化のあり方という大きな課題を提起するにいたっている。

日当遺跡が立地する野津川流域と大野川本流をはさんで西側に位置する大野原台地（平井川・苗川流域）は、大野川中流域では最も密に弥生時代集落跡が分布しており、そのいくつかの内容については近年の調査によって相当明らかにされている。この大野原台地では、二本木遺跡^{28.3}・松木遺跡^{28.4}出土の土器編年によって弥生時代後期前葉から古墳時代前期前葉を6期に分け、それによって二本木遺跡（Ⅰ期～Ⅵ期）、松木遺跡（Ⅰ期～Ⅳ期）、夏足原遺跡^{28.5}（Ⅲ期～Ⅴ期）という集落の存続期間に若干のずれがあることも明らかにされた。

なかでも二本木遺跡・松木遺跡は、集落の規模もさることながら内容の豊富さにおいてもさきわ立っており、とくに後漢鏡片の出土は特記されるべきである。とくに二本木遺跡は、標高240mの台地の狭い部に方形竪穴住居跡群が濃密に検出され、その規模は東西150m、南北250mの範囲に200軒以上密集することが推定

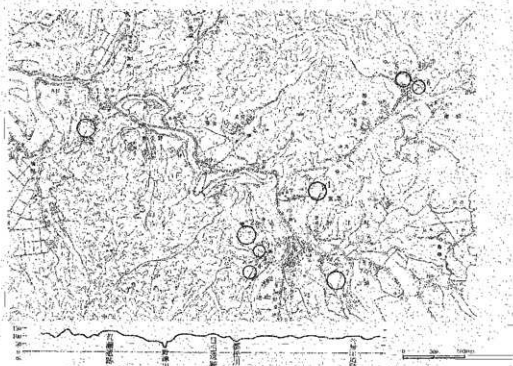


第32図 大野川中流域主要弥生遺跡分布図

された。住居跡等からは、手鎌・打製石斧・モミ痕土器また炭化したアズキ等が出等し、定着した農耕集落であることを示した。また松木遺跡はやや規模は小さいが舌状台地のほぼ全域に集落を営み環溝の一部が確認されている。その存続期間は二本木遺跡に比べ短いものの、後漢鏡片の存在からしてやはり二本木遺跡に次ぐ重要な役割を果たした集落と推測できる。さらに大野川本流に接する独立台地にある夏足原遺跡は、東西1200mに及ぶ広大な台地の両側に住居跡群が対峙するようにあり、その中間部分は畑作の可耕地として好適地と考えられた。またここでは松木遺跡と同様に多量の磨製石鐮が作られており、集落の性格を考えるうえで重要な発見であった。

これらの大野原台地の集落は、古墳時代前期前葉を最後としてそれ以後では台地上から姿を消してしまうが、この地域ではその後に続く時期に造られたとみられる坊ノ原古墳（前方後円墳）御塚古墳（円墳）の二つの古式古墳があることから、台地外においてひきつづいて集落群の発達があったことは窺い視される。二本木遺跡・松木遺跡に代表される台地上の集落は、両古墳に直接関係するものではないが、その前段階におけるこの地域での生産力の高さを十分に示してくれるものであった。

一方野津川流域では、大野原台地ほどの広い台地の発達は見られないが、野津川の兩岸に標高100m前後の台地とそれにつづく段丘が顕著に発達している。そして近年の調査でこれらの台地上にいくつもの弥生時代集落跡が確認されている。大野川本流に近い黒坂遺跡、野津川左岸に近接する原



第33図 野津川流域の主要弥生時代遺跡と地形断面図

- | | | | |
|----------|---------|----------|----------|
| 1. 日当遺跡 | 2. 原遺跡 | 3. 下野遺跡 | 4. 夏足原遺跡 |
| 5. 菅原田遺跡 | 6. 新生遺跡 | 7. 持丸原遺跡 | 8. 黒坂遺跡 |

1600 1200 970 750 620
遺跡、下藤遺跡、荒瀬遺跡、白杵地方に近い菅無田遺跡、新生遺跡等である。これらはいずれも110m～130mの台地上に立地し、低位段丘面との比高差20m～50mを保っている。

これらの立地をみた場合、集落につづく広い可耕地を欠いており、この点大野原台地の3遺跡の立地と大きく異っている。しかし周辺部には水田を考えると有利な小支谷や段丘が発達し、それほど大きくないこれらの集落を維持するうえでの生産基盤にはなりえたとみられる。

こうした中で日当遺跡は、集落につづくなだらかな丘陵面を周辺にもち、かなりの規模の畑作を考えてよい。ただし、この遺跡の場合集落の存続は弥生時代終末期の一時期とそれにつづく古墳時代前期に限られるものであり、集落の終焉の時期は大野原のそれと符合するものである。おそらく古墳時代前期前葉を最後として集落が台地上から消える現象は、これ以後について集落が低地に移行していったことを示すものとみられ、大きな社会変化のあらわれともみなすべきである。とくに最後の古墳時代前期の住居跡2軒の柱穴内に土器の廃棄が顕著にみられたことは、住居の解体→柱の抜き取り→土器廃棄（安置）という祭祀的な行為が組織的に行われたことを示すものであり、これまでにみられなかった象徴的な住居廃棄の行動をうかがうことができる。

大野川流域を中心とする大分県南の弥生時代終末期の遺跡では、後漢鏡片もしくは仿製鏡の住居跡内廃棄という事例が相当にみられる。このことについて高橋徹氏は「弥生的なものの終焉」という表現でその評価を与えている。日当遺跡の集落の最終段階での住居の解体→柱穴内への土器廃棄という現象は、集落そのものへの決別ともいえるべき行為の結果であったとみられる。（清水）
（なお、脱稿後、原遺跡弥生後期の竪穴住居跡内より後漢鏡片（方格規矩鏡）が出土したことを付記しておく。）

注1……西原村教育委員会『谷原遺跡』1978.8

注2……阿蘇実験考古学研究所西弥生遺跡調査団『西弥生遺跡発掘調査要報』1980.11

注3……大野町教育委員会『大野原の遺跡』1980.3

注4……注3に同じ 9p～111p

注5……注3に同じ 112p～119p

注6……注3に同じ 206p～205p

注7……注3に同じ 208p

注8……標高110m、弥生時代終末期の二重口刃釜形土器（定形）が出土している。

注9……標高120m、南北に細長い台地の南側で弥生終末期とみられる住居跡が11軒確認されている。

大分県教育委員会『大分県内遺跡詳細分布調査報告』I 1982.3

注10……標高120m、原遺跡につづく台地上で弥生後期の住居跡7軒が確認されている。注9に同じ。

注11……標高130mの独立性の台地・弥生後期住居跡が11軒確認されている。注9に同じ。

注12……野津町教育委員会『野津川流域の遺跡』I 1976.3

注13……野津町教育委員会『野津川流域の遺跡』II 1981.3

注14……高橋 徹『廃棄された鏡片』『古文化談叢』第6集 1979

Ⅶ 日 当 遺 跡 図 版

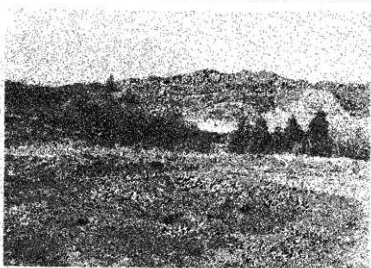
1号住居跡

(北より)



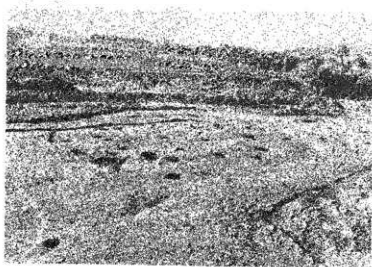
2号住居跡

(南より)



3号住居跡

(東より)



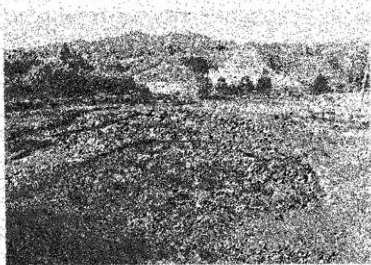
3、4、5号住居跡
5は手前で未掘

(南より)



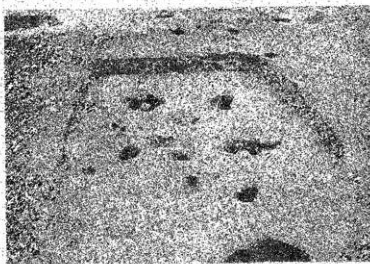
3、4号住居跡
(4号手前)

(南より)



5号住居跡

(南より)



6号住居跡

(手前)

7号住居跡

(北より)



8号住居跡

(手前)

6、7号住居跡

(東より)



10号住居跡

(北西より)



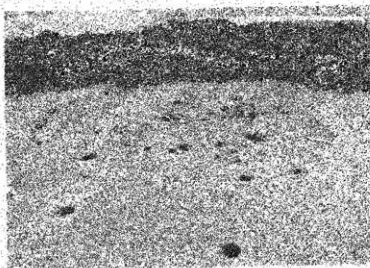
11号住居跡
(手前)
12号住居跡

(北より)



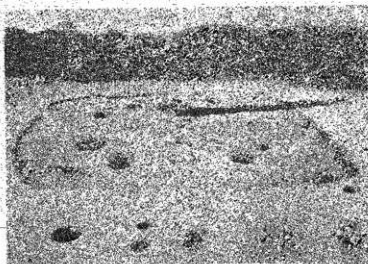
12号住居跡

(西より)

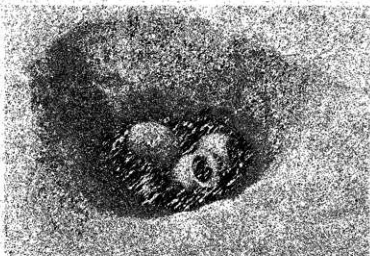


13号住居跡

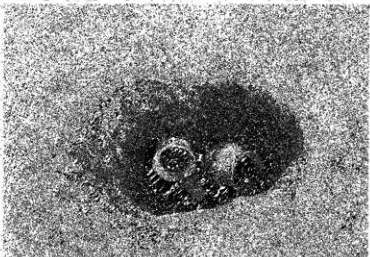
(西より)



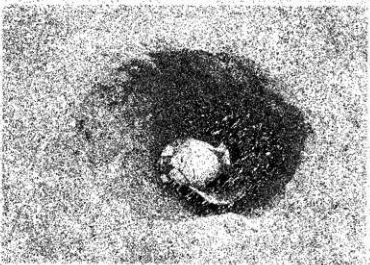
北東ビット



南東ビット

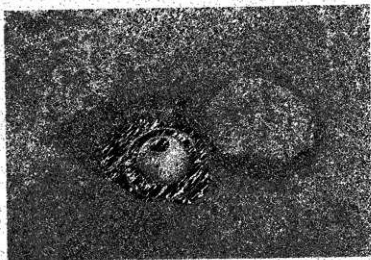


南西ビット



8号住居跡柱穴内廃棄土器出土状況

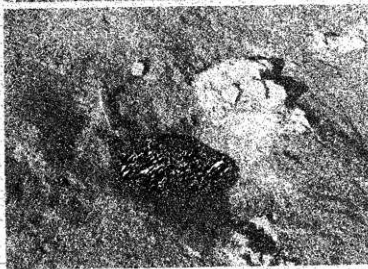
5号住居跡



5号住居跡



4号住居跡



——その他の遺物出土状況



803



804



805



806



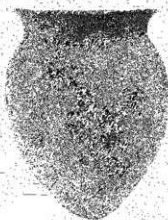
807



808



809



811

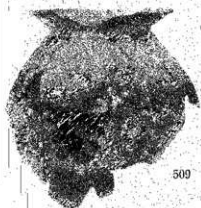


814



813

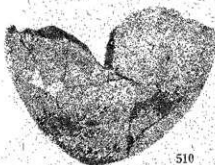
8号住居跡内出土土器



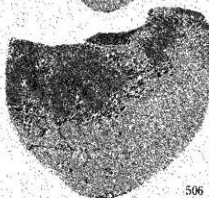
509



505



510



506



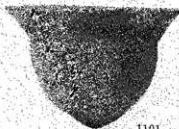
508



503

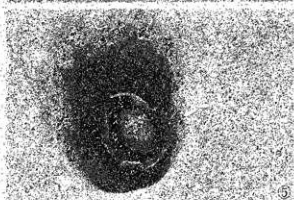
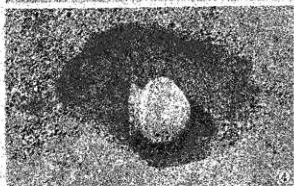
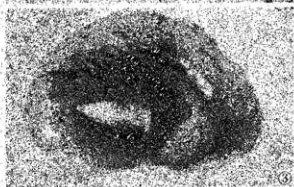
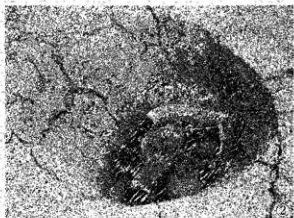
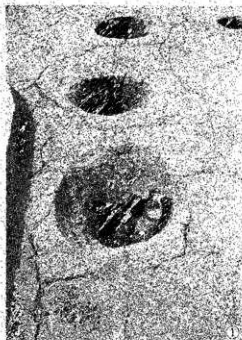


402



1101

10号住居跡内出土土器



- ① 荻町古賀遺跡P地区91号
住居内
- ② 岡垣大
- ③ 同遺跡P地区102号住居内
- ④ 大野町松本遺跡14号
住居内
- ⑤ 同遺跡3B-ab号住居内

県内柱穴内廃棄土器例

VII 日当遺跡周辺の資料

1. 日 当 西 遺 跡

2. 川 平 遺 跡

1. 日当西遺跡

日当西遺跡は、野津町大字宮原字日当に所在し、日当遺跡の西方に位置する。標高 118 m の最高所を中心に四方に傾斜する台地の東側斜面、標高 110 m 前後の所にある。昭和 55 年の土地改良工事の終了後、今回収録する遺物を採集した。遺跡は階段状に削られており、ローム層が現われている場所もあるが、破壊をまぬがれた場所も残っている。

a. 土 器 (第 34 図 1～34、第 34 図 35～49)

採集された土器は縄文時代早期、後期、晩期、弥生時代前半のものである。

早期 (1～8)

押型文土器、無文土器の類である。1 は胎土に繊維と多めの微細な黒雲母 (金色の雲母) を混入しており、2～8 と差異がある。

後期 (9～15、40)

三万田式である。磨消縄文の土器 9～12 と沈線文の土器 12～15 がある。前者は口縁部の 2 本沈線、胴部の平行沈線文により先行する西平式とは区別しうる。

晩期 (16～39、41～45)

19、21～24、30 は前葉に、25～29 は中葉に位置づけられる。

弥生時代前半 (46～49)

46～48 は下城式である。口唇部外側と突起に刻みを持つ土器 46、48、外反する口縁に刻みを持たない土器 47 に分かれる。

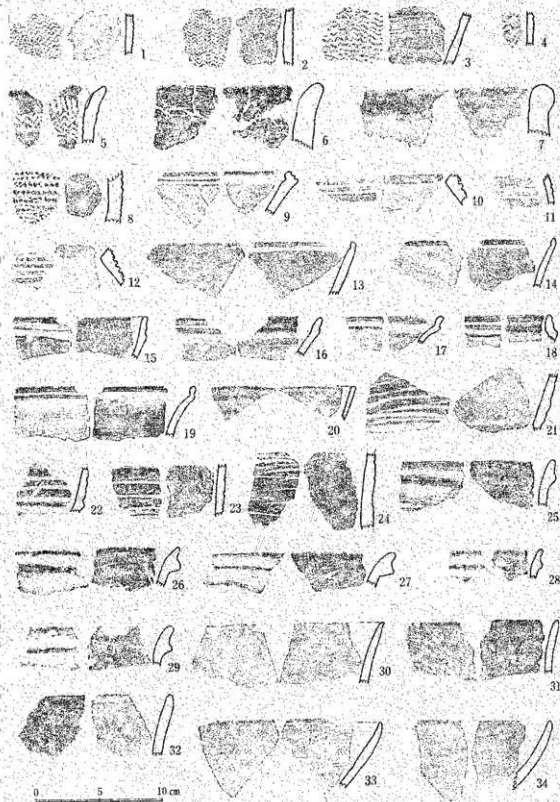
(高 橋)

※注 土層の実測にあたり、口縁部の傾きに気をつけている。その破片から判明する場合は 20 のように実線で示した。

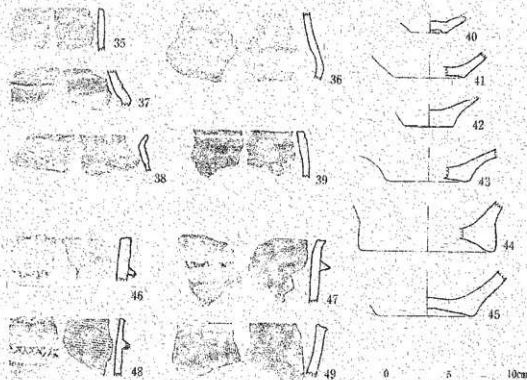
不明確にしか判明しない場合は 15 のように破線を引いている。全く不明の場合は口縁部に線を引いていない。



西遺跡遠景 (日当遺跡より)



第34图 日当西遺跡採集土器実測図



第35図 日当西遺跡採集土器実測図

表11 日当西遺跡採集土器観察表 (胎土の記号: ●多量 ○中量 △少量)

図番	胎土	色	文	形	口	底	土	図番	胎土	色	文	形	口	底	土
1	●	黄	無	丸	平	平	黄	26	●	黄	無	丸	平	平	黄
2	△	黄	無	丸	平	平	黄	27	●	黄	無	丸	平	平	黄
3	○	黄	無	丸	平	平	黄	28	●	黄	無	丸	平	平	黄
4	○	黄	無	丸	平	平	黄	29	○	黄	無	丸	平	平	黄
5	○	黄	無	丸	平	平	黄	30	○	黄	無	丸	平	平	黄
6	○	黄	無	丸	平	平	黄	31	○	黄	無	丸	平	平	黄
7	○	黄	無	丸	平	平	黄	32	○	黄	無	丸	平	平	黄
8	○	黄	無	丸	平	平	黄	33	○	黄	無	丸	平	平	黄
9	○	黄	無	丸	平	平	黄	34	○	黄	無	丸	平	平	黄
10	○	黄	無	丸	平	平	黄	35	○	黄	無	丸	平	平	黄
11	○	黄	無	丸	平	平	黄	36	○	黄	無	丸	平	平	黄
12	○	黄	無	丸	平	平	黄	37	○	黄	無	丸	平	平	黄
13	○	黄	無	丸	平	平	黄	38	○	黄	無	丸	平	平	黄
14	○	黄	無	丸	平	平	黄	39	○	黄	無	丸	平	平	黄
15	○	黄	無	丸	平	平	黄	40	○	黄	無	丸	平	平	黄
16	○	黄	無	丸	平	平	黄	41	○	黄	無	丸	平	平	黄
17	○	黄	無	丸	平	平	黄	42	○	黄	無	丸	平	平	黄
18	○	黄	無	丸	平	平	黄	43	○	黄	無	丸	平	平	黄
19	△	黄	無	丸	平	平	黄	44	○	黄	無	丸	平	平	黄
20	△	黄	無	丸	平	平	黄	45	○	黄	無	丸	平	平	黄
21	○	黄	無	丸	平	平	黄	46	△	黄	無	丸	平	平	黄
22	○	黄	無	丸	平	平	黄	47	△	黄	無	丸	平	平	黄
23	○	黄	無	丸	平	平	黄	48	○	黄	無	丸	平	平	黄
24	○	黄	無	丸	平	平	黄	49	○	黄	無	丸	平	平	黄
25	○	黄	無	丸	平	平	黄								

b. 石器 (図-36・37、表-12)

日当西遺跡で採集された石器・断片は多く各時期におよんでいる。

本稿では量的にややまとまっている石斧について述べる。石斧は全体に軟質の石材を利用し、薄く仕上げられたものである。これは大野川流域で「扁平石斧」、「扁平打製石斧」と呼ばれる石器に特徴が一致する。

本遺跡では先に述べられた如く、縄文後期後葉と晩期前～中葉の存在が明らかで、大半の石斧はこの2時期に伴うものと考えられる。以下、その若干の考察を行なう。なお、個別の説明は表-12にかえ、ここでは全体を各要素別に概観するととどめる。

石斧の素材に利用された石質は、玄武岩が最も多く、粘板岩・頁岩・緑色片岩と続く。何れも大野川東岸では入手可能な石材である。自然面が観察できる石斧は玄武岩に多く、全体の約半数におよび、緑色片岩を除いて総て円礫面を残している。

これらの点から、石材の多くは付近の河川域で採集されたものと推定したい。

素材断片に見られる断片形態は圧倒的に横長のものが多い。欠損品が多く、資料数の絶対的な少なさから、三次調整・形態については不明な点が多い。しかし、単に形態のみからは大別して2種に分類してよさそうである。

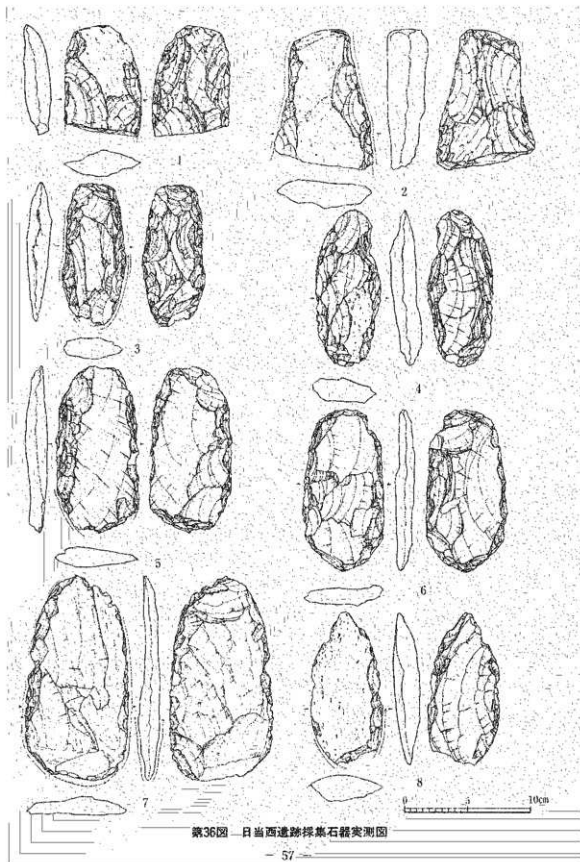
まず図36-1～8の様にやや大形(長さ10cm以上、器厚2cm前後)、基本的形態は末広りの短冊形か長楕円形を呈するもの。つぎに図37-9～14の様にやや小形(長さ10cm以下、器厚1cm前後)、末広りの短冊形を呈するものである。研究調整を持つ3・4は後者に含まれる。

最後に使用痕についてであるが、基部・先端部が欠くものが多く約半数におよぶ。刃部は原形を保っているものでも、刃こぼれ・小欠損が目立つ。著しい線状痕を有するもの(20)や磨滅が観察されるもの(7・21)もある。

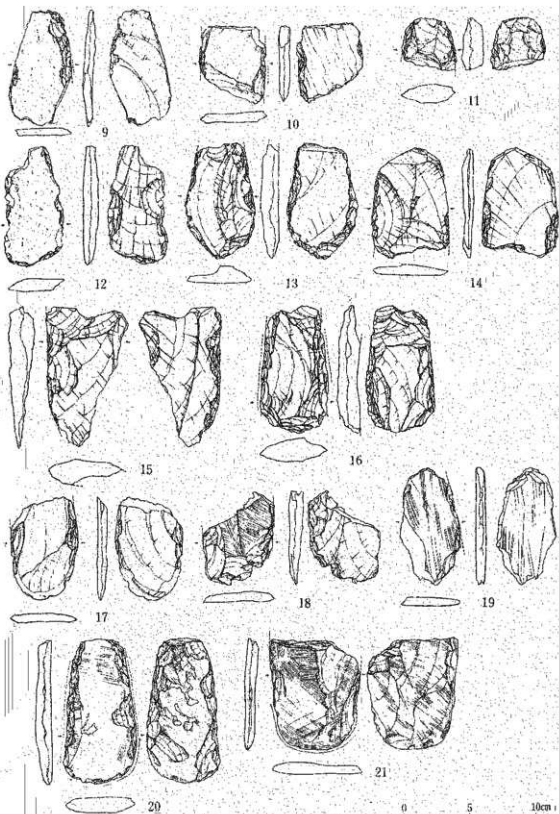
以上、これらの石斧は石材ごとの形態・製作技術の上から分類できるが、石材供給のあり方や使用痕では特に峻別されるものではない。二時期の石斧を含むものとするれば、現段階では、その差は少ないと言えよう。何れにせよ今後の良好な資料の増加を待って再検討したい。(古 留)

表12 日当西遺跡採集石器観察表 ※ () 内は現存数

番号	計測値 (cm, g)				素材の要素		調整の要素		使用・痕・火傷		
	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	自然面の有無	調整の程度	調整の箇所	使用状況	火傷箇所	磨滅・痕跡
1	(8.8)	6.1	2.0	122	玄武岩	有	横 線	両側とも有	無	半欠品	先 端
2	(13.2)	(7.9)	3.2	292	玄武岩	有	横 線	両側とも有	無	半欠品	先 端
3	(11.2)	5.1	1.8	123	頁岩	無	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
4	12.4	5.3	2.1	192	玄武岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
5	13.2	6.6	1.8	162	頁岩	無	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
6	12.8	6.8	1.4	175	頁岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
7	(16.3)	8.2	1.7	235	粘板岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
8	12.6	6.8	2.1	162	玄武岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
9	8.8	(4.8)	0.7	52	緑色片岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
10	(6.0)	5.1	0.8	38	緑色片岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
11	(4.0)	(4.1)	1.4	27	玄武岩	無	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
12	(9.1)	4.6	1.0	55	頁岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
13	(8.7)	5.4	1.3	78	頁岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
14	(8.3)	(5.9)	0.8	50	粘板岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
15	(10.6)	(6.2)	1.9	101	玄武岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
16	9.5	5.2	(7.1)	104	頁岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
17	7.8	5.1	0.8	48	緑色片岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
18	7.0	(5.4)	1.1	30	粘板岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
19	8.8	(1.6)	0.7	42	緑色片岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
20	10.9	5.6	1.2	123	頁岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有
21	(8.2)	(6.9)	0.9	78	粘板岩	有	横 線	両側とも有	無	先 端	両側とも有



第36図 日当西遺跡採集石器実測図



第37圖 日当西遺跡採集石器実測図

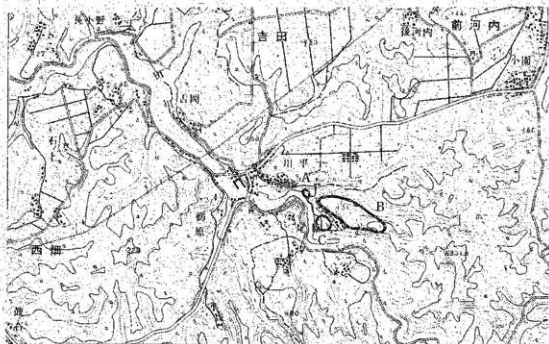
2. 川平遺跡 (野津町大字吉田字川平)

標高100～160mの西北方向に傾斜する台地で、A、B、C地点に分かれる。

A地点は台地の先端に位置し、吉田川との比高数mの低い場所にある。果樹園として利用されており、約40×20mの小範囲である。なお、A地点は1977年に資料紹介されたことがある。

B地点は台地の上面で、約500mにわたり焼石、土器、石器が散乱している。昭和53年にC地点と共に土地改良が行われ、階段状に整形されている。

C地点はB地点の一段下の台地である。ここも数段に整形され遺物が散乱している。畑の表面が黒色土の場所で旧石器、縄文の遺物を採集した。



第38図 川平遺跡位置図 (25,000分の1)

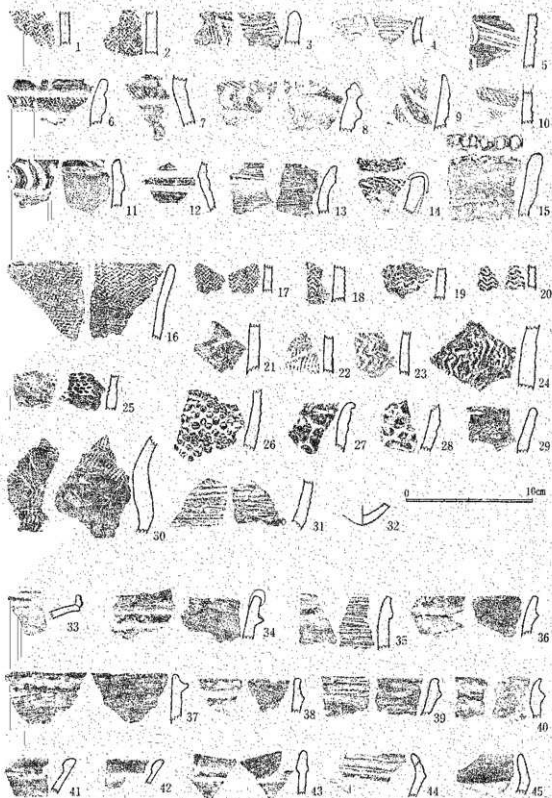
a. 土 器 (第39・40図)

A地点 縄文時代早期(1～3)、前期(4)、後期(5～15)の遺物である。4は外面に細い隆起突帯があり轟B式である。5は福田KⅡ式。6～15は小池原土層式とそれと共伴すると思われる土器である。

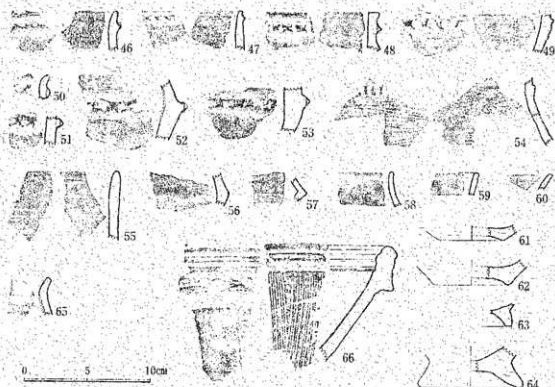
B地点 31が縄文時代後期である以外は、全て早期に属する。23は他と胎土、色調で異なる。手向山式と思われる。

C地点 33は楕円凹点文のある浅鉢で御領式である。34～43は晩期中葉で、41、42は黒土BⅡ式の浅鉢に類似している。46～54は晩期後葉の刻目突帯文土器である。65は弥生前期の壺形土器と思われる。頸部外面に段を持つ。本資料は当地域の弥生前期の空白を埋めるものである。66はすり鉢。

(高 橋)



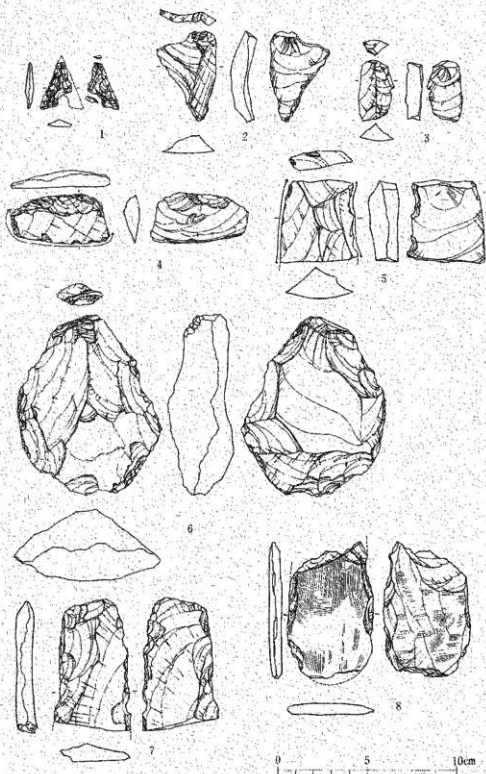
第39図 川平 (A…1~15・B…16~32・C…33~45) 遺跡採集土器実測図



第40図 川平遺跡C地点採集土器実測図

表13 川平遺跡採集土器観察表(胎土の記号:●多量 ○中量 △少量)

番号	形状	土質	文様	特徴	備考	番号	形状	土質	文様	特徴	備考
1	丸底	白土	なし	多量	タ	21	丸底	白土	なし	多量	
2	丸底	白土	なし	多量	タ	22	丸底	白土	なし	多量	
3	丸底	白土	なし	多量	タ	23	丸底	白土	なし	多量	
4	丸底	白土	なし	多量	タ	24	丸底	白土	なし	多量	
5	丸底	白土	なし	多量	タ	25	丸底	白土	なし	多量	
6	丸底	白土	なし	多量	タ	26	丸底	白土	なし	多量	
7	丸底	白土	なし	多量	タ	27	丸底	白土	なし	多量	
8	丸底	白土	なし	多量	タ	28	丸底	白土	なし	多量	
9	丸底	白土	なし	多量	タ	29	丸底	白土	なし	多量	
10	丸底	白土	なし	多量	タ	30	丸底	白土	なし	多量	
11	丸底	白土	なし	多量	タ	31	丸底	白土	なし	多量	
12	丸底	白土	なし	多量	タ	32	丸底	白土	なし	多量	
13	丸底	白土	なし	多量	タ	33	丸底	白土	なし	多量	
14	丸底	白土	なし	多量	タ	34	丸底	白土	なし	多量	
15	丸底	白土	なし	多量	タ	35	丸底	白土	なし	多量	
16	丸底	白土	なし	多量	タ	36	丸底	白土	なし	多量	
17	丸底	白土	なし	多量	タ	37	丸底	白土	なし	多量	
18	丸底	白土	なし	多量	タ	38	丸底	白土	なし	多量	
19	丸底	白土	なし	多量	タ	39	丸底	白土	なし	多量	
20	丸底	白土	なし	多量	タ	40	丸底	白土	なし	多量	
21	丸底	白土	なし	多量	タ	41	丸底	白土	なし	多量	
22	丸底	白土	なし	多量	タ	42	丸底	白土	なし	多量	



第41図 川平遺跡採集遺物 (石器)

日 当 遺 跡

大分県野津町所在遺跡発掘
調査報告書

大分県文化財調査報告
第 58 輯

昭和57年3月31日

発 行 大分県教育委員会
大分市府内町3-10-1

印 刷 東洋印刷有限会社
別府市千代町10-27

